
越 谷 市

越谷警察署前遺跡

越谷警察署仮設庁舎建設工事

(越谷警察署前遺跡 (No.78-016)

埋蔵文化財発掘調査業務委託)

埋蔵文化財発掘調査報告

2022

埼 玉 県

公益財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団

序

このたびの「越谷警察署前遺跡」に係る発掘調査報告書の刊行にあたりまして、御尽力賜りました関係の皆様方に深く感謝を申し上げます。

越谷警察署は、人口急増地域の防犯対策を担う重要な施設であり、越谷警察署改築に先立ち、このたび仮庁舎が設置されることとされました。

一方、当該設置工事に係る事業予定地とその周辺には、埋蔵文化財包蔵地の存在が知られています。

こうしたことから、関係者間で慎重な協議を重ねた結果、事業実施にあたっては、県教育委員会により文化財保護法に基づき、発掘調査を実施し記録保存の措置を講じることとされたところです。

そこで当事業団が埼玉県から委託を受け、事業予定地の発掘調査を行い、その記録を報告書として、今般刊行することとなりました。

発掘調査の結果、平安時代の土壌や江戸時代の井戸跡などが発見され、当時の土器や陶磁器が出土しました。元荒川沿いに育まれた地域の文化と歴史を明らかにするうえで、貴重な資料を得ることができました。

本書は、これらの発掘調査成果をまとめたものです。埋蔵文化財の保護及び普及啓発の資料として、また学術研究の基礎資料として、多くの方々に活用していただければ幸いです。

最後に、本書の刊行にあたり、埼玉県警察本部総務部財務局施設課、埼玉県教育局市町村支援部文化資源課、越谷市教育委員会、地元関係者等の皆様に重ねて御礼申し上げます。

令和4年3月

公益財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団
理 事 長 依 田 英 樹

例　　言

- 1 本書は埼玉県越谷市東越谷地内に所在する越谷警察署前遺跡（第1次調査）の発掘調査報告書である。
- 2 遺跡の代表地番、発掘調査届に対する指示通知は、以下のとおりである。

越谷警察署前遺跡（No78-016）

第1次調査

埼玉県越谷市東越谷7丁目11-6他

令和3年9月1日付け教文資第2-23号

- 3 発掘調査は、越谷警察署仮設庁舎建設地内における埋蔵文化財記録保存のための事前調査である。埼玉県教育局市町村支援部文化資源課が調整し、埼玉県の委託を受け、公益財團法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団が実施した。

- 4 事業の委託事業名は下記のとおりである。

発掘調査・報告書作成事業（令和3年度）

越谷警察署仮設庁舎建設工事（越谷警察署前遺跡（No78-016）埋蔵文化財発掘調査業務委託）

- 5 発掘調査・報告書作成事業はI-3に示した組織により実施した。発掘調査期間と担当者は以下のとおりである。

発掘調査は令和3年10月1日から令和3年12月31日まで、岩瀬 謙・菊池耕晏が担当した。

報告書作成事業は令和4年1月1日から令和4年3月31日まで、富田和夫が担当した。

報告書は令和4年3月23日に埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第478集として、印刷・刊行した。

6 発掘調査における基準点測量は、株式会社未央測地設計、空中写真撮影は株式会社東京航業研究所に委託した。

7 発掘調査における写真撮影は各担当者が行い、出土遺物の写真撮影は富田が行った。

8 出土品の整理・図版作成は主に富田が行い、遺物は村山 卓・水村雄功・古間果那子の協力を得た。

9 本書の執筆は、I-1を埼玉県教育局市町村支援部文化資源課、その他を富田が行った。

10 本書の編集は、富田が行った。

11 本書にかかる諸資料は、令和4年4月以降埼玉県教育委員会が管理・保管する。

12 発掘調査・報告書刊行にあたり、下記の機関・方々から御教示・御協力を賜った。記して感謝いたします。（敬称略）

越谷市教育委員会

菟原雄大・太田博之・橋本充史・松本 完

凡 例

- 1 本書におけるX・Yの数値は、世界測地系国土標準平面直角座標第IX系（原点北緯36° 00' 00"、東経139° 50' 00"）に基づく座標値を示す。また、各挿図に記した方位はすべて座標北を示している。
C-3グリッド杭の座標はX=-11710.000m、Y=-2770.000m、北緯35° 53' 40.0204"、東経139° 48' 09.5371"である。
- 2 調査で使用したグリッドは、国土標準平面直角座標に基づく10×10mの範囲を基本（1グリッド）とし、調査区全体をカバーする方眼を組んだ。
- 3 グリッド名称は、北西隅を基点とし、北から南方向にアルファベット（A・B・C…）、西から東方向に数字（1・2・3…）を付し、アルファベットと数字を組み合わせ、例えばC-3グリッドと呼称した。
- 4 本書における本文・挿図・表に示す遺構の略号は、以下のとおりである。
S E…井戸跡 SK…土壤
P…ピット
- 5 本書に掲載した遺構番号は、発掘調査時に付した番号を踏襲した。
- 6 本書における挿図の縮尺は、以下のとおりである。但し、一部例外もあり、それについては図中に縮尺とスケールを示した。
調査区全体図 1:200 1:100
基本層序 1:60
井戸跡・土壤・畝状遺構・ピット 1:60
- 土師器・須恵器 1:4
拓影図 1:3
土師質土器・瓦質土器 1:3 1:4
陶磁器類・かわらけ 1:3
瓦 1:3
石製品 1:4
鉄製品 1:2 1:3
土製品 1:2
- 7 遺構断面図に表記した水準数値は、全て海拔標高（単位m）を表す。
- 8 遺構図中の斜線の網掛けは地山を表す。
- 9 遺物観察表の表記方法は以下のとおりである。
 - ・大きさはcm・重さはg 単位である。
 - ・（ ）内は推定値、〔 〕は残存値を示す。
 - ・胎土は土器中に含まれる鉱物等のうち、特徴的なものを記号で示した。
A : 雲母 B : 片岩 C : 角閃石 D : 長石
E : 石英 F : 輻石 G : 砂粒子
H : 赤色粒子 I : 白色粒子
J : 白色針状物質 K : 黒色粒子 L : その他
M : チャート N : 雲母状微粒子
・残存率は図示した器形に対する大まかな遺存程度を%で示した。
・焼成は良好・普通・不良の3段階に分けた。
・備考には注記No・推定生産地・文様の特徴等を示した。
- 10 本書に使用した地形図は、国土地理院発行1/50,000地形図、越谷市発行の1/2,500都市計画基本図を編集の上使用した。

目 次

序

例言

凡例

目次

I 発掘調査の概要	1	(1) 土壌	17
1 発掘調査に至る経過	1	2 近世以降の遺構と遺物	18
2 発掘調査・報告書作成の経過	2	(1) 井戸跡	18
3 発掘調査・報告書作成の組織	3	(2) 土壌	19
II 遺跡の立地と環境	4	(3) 畝状遺構	24
1 地理的環境	4	(4) ピット	25
2 歴史的環境	6	(5) グリッド他出土遺物	28
III 遺跡の概要	13	V 調査のまとめ	30
IV 遺構と遺物	17	1 古代の遺物について	30
1 平安時代の遺構と遺物	17	写真図版	

挿図目次

第1図 埼玉県の地形	4	第11図 第1・2号井戸跡出土遺物	19
第2図 周辺の地形	5	第12図 第1~10・12号土壌	20
第3図 周辺の遺跡	8	第13図 第1号土壌出土遺物	21
第4図 基本土層図	13	第14図 第12号土壌出土遺物	24
第5図 越谷市の地形と遺跡位置図	14	第15図 第1~12号畝状遺構	26
第6図 全体図	15	第16図 ピット出土遺物	26
第7図 全体図(部分)	16	第17図 ピット	27
第8図 第11号土壌	17	第18図 グリッド他出土遺物	28
第9図 第11号土壌出土遺物	17	第19図 参考資料(1)	31
第10図 第1・2号井戸跡	18	第20図 参考資料(2)	32

表目次

第1表 周辺の遺跡一覧	9	第6表 破壊構造一覧表	25
第2表 第11号土壤出土遺物観察表	18	第7表 ピット出土遺物観察表	26
第3表 第1・2号井戸跡出土遺物観察表	19	第8表 ピット一覧表	27
第4表 第1号土壤出土遺物観察表	22	第9表 グリッド他出土遺物観察表	29
第5表 第12号土壤出土遺物観察表	25		

写真図版目次

図版1	1 調査区遠景（東から）	8 B区東側土壤・ピット群
	2 調査区全景（合成：垂直写真）	図版4 1・2 第11号土壤出土遺物
図版2	1 A区全景	3 第1号井戸跡出土遺物
	2 B区全景	4・5 第2号井戸跡出土遺物
	3 基本土層	6~12 第1号土壤出土遺物
	4 第1号井戸跡土層断面	図版5 1 第1号土壤出土遺物
	5 第1号井戸跡	2~6 第12号土壤出土遺物
	6 第2号井戸跡遺物出土状況	7 B-1グリッドP1出土遺物
	7 第2号井戸跡	8 A-1グリッドP6出土遺物
	8 第1号土壤遺物出土状況	9・10 グリッド他出土遺物
図版3	1 第1号土壤	11 B-4グリッド出土遺物
	2 第5号土壤	図版6 1 B-3グリッド出土遺物
	3 第6号土壤	2 B-4グリッド出土遺物
	4 第8号土壤	3・4 C-4グリッド出土遺物
	5 第11号土壤遺物出土状況	5~11 グリッド他出土遺物
	6 第11号土壤近景	12 金属製品
	7 第12号土壤	

I 発掘調査の概要

1 発掘調査に至る経過

埼玉県警察本部総務部財務局施設課では、越谷警察署改築に先立つ仮設庁舎建設を予定している。

埼玉県教育局市町村支援部文化資源課では、県が実施するこうした公共開発事業に係る埋蔵文化財の保護について、従前から関係機関と事前協議を重ね、調整を図ってきたところである。

越谷警察署改築における仮設庁舎建設事業については、令和元年6月7日付け施第1389号で、警察本部総務部財務局施設課長から埋蔵文化財の所在の有無およびその取扱いについて照会があった。

事業予定地は「No.16遺跡(78-016)」に該当しており、埼玉県教育委員会が令和元年6月26日、27日と、令和2年4月30日に確認調査を実施したところ、奈良時代・平安時代・江戸時代と思われる構造や遺物が確認された。この結果に基づき、令和2年5月14日付け教文資第202-1号で、次のとおり警察本部総務部財務局施設課長宛て回答した。

1 埋蔵文化財の所在

工事予定地内には次の埋蔵文化財包蔵地が存在します。

名称	種別	時代	所在地
No.16遺跡(78-016)	集落跡	奈良・平安・江戸	越谷市東越谷7丁目 11-7, 11-6, 11-8, 11-9

2 法手続き

工事予定地内には、上記の埋蔵文化財包蔵地が存在します。包蔵地内で工事着手する場合は、文化財保護法第94条の規定に基づき、発掘通知を提出してください。

3 取扱いについて

別添図のうち、「発掘調査を要する区域」につ

いては、工事計画上やむを得ず現状を変更する場合には、記録保存のための発掘調査を実施してください。「工事に着手して差し支えない箇所」については、工事に着手して差し支えありませんが、工事中に新たに埋蔵文化財を発見した場合は、直ちに工事を中止して、取扱いについて当課と協議してください。

なお、当遺跡は、遺跡の所在地をわかりやすくするため、令和2年5月26日に遺跡名を「越谷警察署前遺跡(78-016)」に変更している。

その後、埋蔵文化財の保護について協議を行つたが、事業の計画変更及び埋蔵文化財の現状保存は困難との結論に達したため、記録保存の措置を講ずることとした。

調査に際し、発掘調査実施機関である公益財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団と、警察本部総務部財務局施設課、文化資源課の三者で、工事日程、調査計画、調査期間などについて会議を開催し、各種の調整を行つた。

文化財保護法第94条第1項の規定に基づく埼玉県知事からの通知に対する同条第4項の規定による埼玉県教育委員会教育長からの勧告は以下のとおりである。

令和3年9月1日付け教文資第4-991号

文化財保護法第92条第1項の規定に基づく公益財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団理事長からの発掘調査届に対する埼玉県教育委員会教育長からの指示通知は以下のとおりである。

令和3年9月1日付け教文資第2-23号

(埼玉県教育局市町村支援部文化資源課)

2 発掘調査・報告書作成の経過

(1) 発掘調査

越谷警察署前遺跡の発掘調査は、越谷警察署仮設庁舎建設工事に先立ち、令和3年10月1日から令和3年12月31日まで実施した。

調査面積は783.20m²である。令和3年9月1日に埋蔵文化財発掘調査届を越谷市教育委員会に提出し、事務手続きを行った。

調査はL字状の調査区の西側を第1回目(A区)、東側を第2回目(B区)とし、反転調査とした。

まず、西側調査区は10月1日に現地の準備に着手し、10月4日から10月8日にかけて碎石撤去・防塵ネット・木柵の設置、事務所の設置作業を行った。

10月11日からA区の重機による表土掘削作業を開始し、合せて基準点測量を実施した。10月13日に器材搬入を行い、調査体制を整えた。

10月14日から補助員を投入して遺構確認作業を開始した。10月18日には基準点測量に基づき、測量杭の打設作業を行った。

A区の遺構確認作業の結果、井戸跡2基、土壙8基、畝状遺構12条、ピット31基が検出された。順次遺構精査を実施し、合せて遺構断面図・平面図、個別の写真撮影等の記録作成作業を実施した。

令和3年11月11日高所作業車による全景写真撮影とドローンによる空中写真撮影を実施した。令和3年11月12日～16日まで補助員作業は中断し、重機による埋戻しと第二回目(B区)調査区の表土掘削作業を実施した。

令和3年11月22日にB区の測量杭打設作業を行い、合せて補助員による遺構確認作業を開始した。

遺構確認作業の結果、B区からは土壙4基、ピット8基が検出された。A・B区合せた遺構総数は井戸跡2基、土壙12基、畝状遺構12条、ピット39基である。

順次遺構精査を実施し、合せて遺構断面図・平面図、個別の写真撮影等の記録作成作業を実施した。12月14日高所作業車による俯瞰撮影とドローンによる空中写真撮影を実施し、現地調査は終了した。

12月15日から埋戻し作業を開始し、合せて器材搬出作業を行った。

12月16日には事務所を撤去した。12月17日越谷警察署に埋蔵物発見届(越谷警察署長宛)と埋蔵文化財保管証(埼玉県教育長宛)を提出した。12月20日には埋戻し作業を終了した。

12月21日に開柵・防塵ネットを撤去し、碎石復旧作業に取り掛かる。22日碎石の復旧作業を終え、現地作業はすべて終了した。

(2) 報告書作成

報告書作成事業は、令和4年1月1日から令和4年3月31日まで実施した。遺物は水洗・注記後、接合・復元作業を行った。接合した遺物は実測図を作成した。実測には磁場式三次元位置測定装置、正射投影画像撮影機を活用した。

遺物実測図はトレースと必要に応じて拓本を探った。スキャナを使用してこれらをデジタルデータ化し、編集して挿図版下を作成した。

また令和4年1月下旬から2月初旬に遺物写真を撮影し、写真図版の版下を作成した。

遺構は、発掘調査で作成された平面図・土層断面図等を修正・編集して第二原図を作成した。パソコンを使用してデジタルトレースと編集作業を行い、印刷用の挿図版下を作成した。

遺構写真は、発掘調査で撮影したものから選択・編集し、写真図版用の版下を作成した。令和4年1月下旬から2月にかけて原稿を執筆し、遺構・遺物の挿図と写真図版などを組み合わせて割付を作成した。

2月17日印刷業者に入稿し、校正を3回行い、
令和4年3月23日に埼玉県埋蔵文化財調査事業団
報告書第478集『越谷警察署前遺跡』(本書)を刊

行した。

図面・写真・データ・遺物等の諸資料は、埼玉
県教育委員会が管理・保管する。

3 発掘調査・報告書作成の組織

令和3年度（発掘調査）

理 事 長	依 田 英 樹	調査部	
常務理事兼総務部長	福 沢 景	調 査 部 長	田 中 広 明
総務部		調 査 部 副 部 長	渡 辺 清 志
総務部副部長	上 野 真由美	主 任 専 門 員	岩 瀬 譲
総務課長	鈴 木 裕 一	主 事	菊 池 耕 晏

令和3年度（報告書作成）

理 事 長	依 田 英 樹	調査部	
常務理事兼総務部長	福 沢 景	調 査 部 長	田 中 広 明
総務部		調査部副部長兼整理第一課長	福 田 聖
総務部副部長	上 野 真由美	整 理 第 二 課 長	金 子 直 行
総務課長	鈴 木 裕 一	主 任 専 門 員	富 田 和 夫

II 遺跡の立地と環境

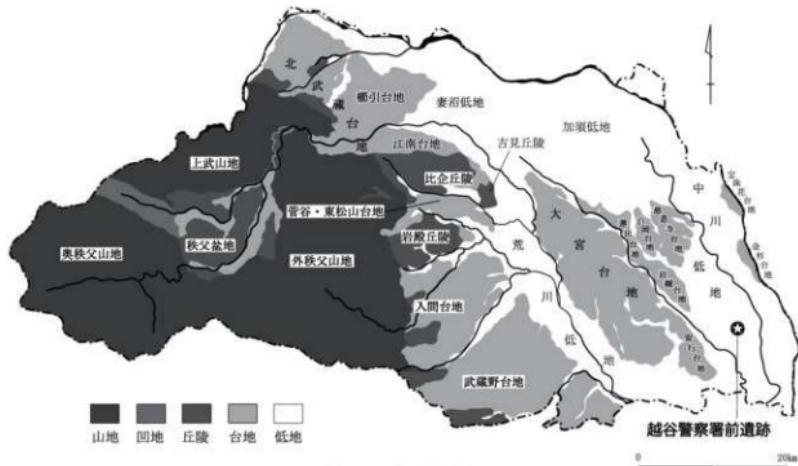
1 地理的環境

越谷警察署前遺跡は越谷市東越谷に所在する。越谷市は埼玉県の東南部に広く展開する中川低地に位置する。中川低地は埼玉県東南部に分布する荒川低地と川口市南部で合流し、東京の下町低地に続いている。中川低地の西側には大宮台地が南北に広く展開する。大宮台地の東部には蓮田台地・白岡台地・慈恩寺台地が、その南には岩槻台地と安行台地の各支台が分布している。大宮台地は河川の浸食により谷地形が発達し樹枝状の複雑な地形が展開する。

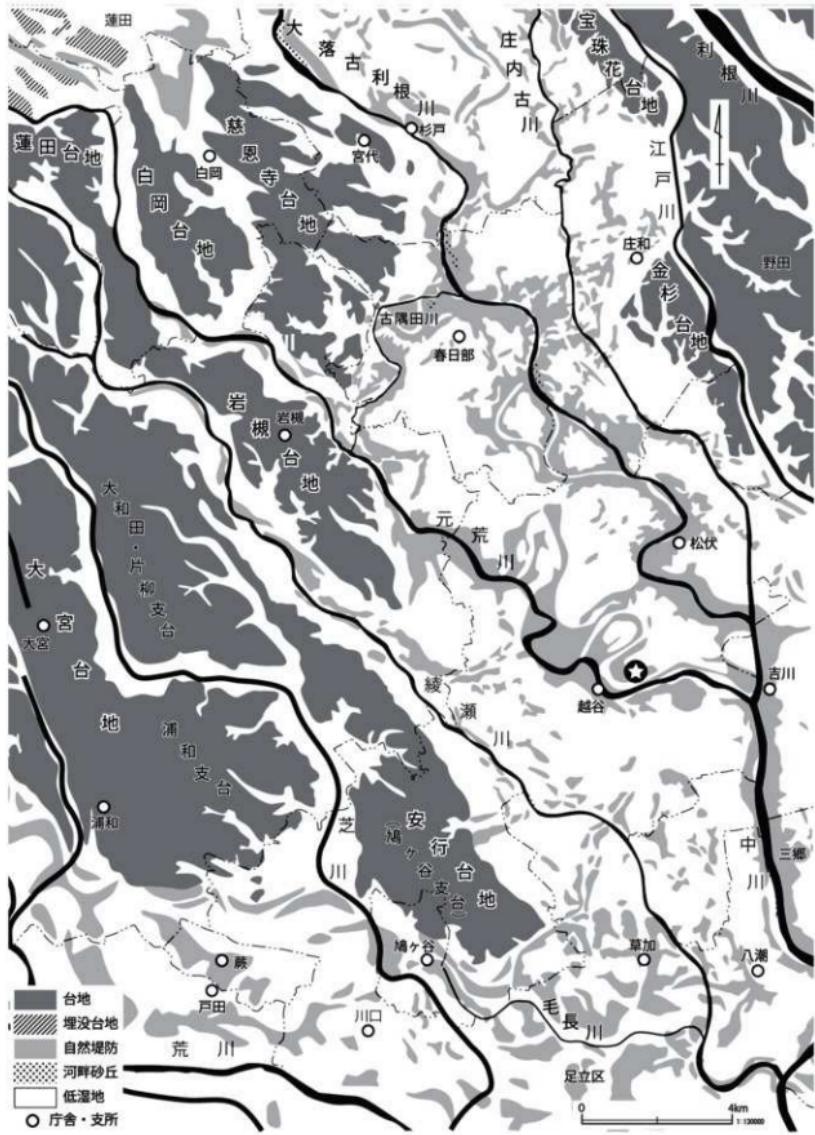
一方、中川低地の東には下総台地が広がっている。下総台地は幸手市から杉戸町を経て春日部市北部にかけて宝珠花台地、春日部市から松伏町にかけて金杉台地が展開している（第1図）。

宝珠花台地と金杉台地それぞれを分断するように南北に流れる江戸川は、江戸時代の利根川東遷事業に伴い寛永18年（1641）に人工的に開削された河川である。それ以前の利根川本流は、現在の

会の川から大落古利根川を経て中川に合流し、吉川市で元荒川を合わせた後、中川・江戸川・古隅田川に分かれて江戸湾に注いでいた。「古隅田川」と呼称する河川は、東京都足立区・葛飾区境と春日部周辺にある。もともとは武蔵と下総境を流れる1本の河川であったという。春日部周辺の古隅田川は春日部駅北側で大落古利根川と接続し、さいたま市岩槻区大戸付近で元荒川と合流する。かつての利根川の河道とされ、この古隅田川流路を含む利根川の旧河道は、律令国家以来江戸時代初頭まで武蔵国と下総国を分かつ国境河川として機能した。古利根川は古隅田川を経由して元荒川に流下していたが、現在の流路は元荒川から古隅田川を経由して古利根川に流れ込んでいる。この流路の逆転現象について鬼塚知典は、河畔砂丘の研究成果を援用しつつ渡良瀬川から古隅田川・元荒川に流れるルート（流路）の存在を想定した（鬼塚2018）。



第1図 埼玉県の地形



第2図 周辺の地形

柿沼幹夫は鬼塚の説を承けて、縄文時代に荒川低地を流れていた利根川が、大宮一館林台地を超えて加須低地から中川低地に流下するよりも以前に、思川を合わせた渡良瀬川が二筋となって杉戸町を経由して旧庄和町付近で南西に方向を変えると推測した。この二筋の流路は春日部市梅田付近で合流し古隅田川となり、さいたま市岩槻区大戸付近で元荒川を合わせ、蛇行しつつ中川に入ると考え、この河道を「渡良瀬-古隅田-元荒川ルート」と呼んだ。さらに、このルートを介して弥生時代中期から後期、古墳時代前期の東関東系・南東北系土器が持ち込まれたと考えた（柿沼2021）。

越谷市は中川低地内に位置するため、洪積台地は存在しない。市域には西から綾瀬川、元荒川、大落古利根川とその支流が北西から南東方向に蛇行しつつ流れ、その流域には自然堤防が発達している。現在、元荒川の流路は蛇行（曲流）部分の直線化が進んでいるが、元荒川と古利根川の流路については、現在の流路に沿った形で自然堤防が発達している（第2図）。

一方、市域の西部を南流する綾瀬川の流路は自然堤防が細かく分断・分散しており、嘗て乱流していた痕跡を留めている。

越谷市の標高は北部で6.0m、南部で4.0m前後、平均斜度は1,000分の0.4と低地帯を象徴する

ように非常に緩やかな傾斜である。市域の微地形を観察すると、自然堤防とその後背湿地から形成される高低差1m前後の緩やかな起伏が顕著である。近年までは自然堤防上の微高地に住宅と集落が形成され、後背湿地が水田として土地利用されていたが、近年は都市化の進展に伴い後背湿地にも住宅が建設され、景観が急速に変化している。

さて、第5図は越谷市域の自然堤防に遺跡をプロットしたものであるが、遺跡はほとんどが自然堤防上に立地していることがわかる。特に元荒川流域の自然堤防に遺跡が集中する傾向が認められる。元荒川は熊谷市久下・佐谷田を起点とし、行田市築道下遺跡、埼玉古墳群の近くを南下し、鴻巣市生出塚遺跡・中三谷遺跡、蓮田市荒川附遺跡等、古墳時代から古代埼玉郡の主要遺跡を貫流し、越谷市中島で中川に合流する、まさに古代埼玉郡の「母なる川」ともいえる河川である。元荒川流域の遺跡分布密度が高い背景も元荒川自体の担う性格に起因するのかもしれない。

越谷警察署前遺跡は元荒川の左岸に位置し、遺跡の南500mには元荒川が東流している。遺跡周辺の標高は約4.0mである。微地形を観察すると、調査区周辺が高く、元荒川の流れに直交する南北反対の北方向は若干低くなっている、自然堤防の高まりを利用して遺跡を形成したことがわかる。

2 歴史的環境

越谷市内の遺跡は関東造盆地運動の影響もあり、非常に少ないため周辺地域を含めて概観したい。
旧石器時代

大宮台地に含まれる安行台地では川口市呑原遺跡（221）からナイフ形石器と尖頭器を主体に10箇所の石器集中が検出された。また川口市ト伝遺跡（223）でナイフ形石器と石器集中が、赤山陣屋跡（226）では砂川期のナイフ形石器と石器集中が検出された。春日部市風早遺跡（41）は下総台地金杉支台に位置し、局部磨製石斧と細石器が2枚の

文化層から出土した。前者は後期旧石器時代初頭の示準的な石器で、武藏野台地の第II暗色帯に対比できる資料である。金杉支台上には、後期旧石器時代前半の馬場遺跡（42）、後期旧石器時代終末の細石刃核が出土した米島貝塚（48）がある。

縄文時代

縄文時代草創期では、安行台地の鳩ヶ谷支台にあるさいたま市えんぎ山遺跡（135）から隆起線文・爪型文、多縄文系土器が出土し、該期の基準資料となっている。

縄文時代早期～前期になると、気候の温暖化に伴い海平面が上昇した。いわゆる「縄文海進」である。縄文海進最高潮期には栃木県藤岡町付近まで海が浸入したことが想定されており、中川低地は広く奥東京湾に取り込まれた。その周囲に大宮台地と下総台地が対峙し、台地縁辺部が浅海性の海洋資源に依拠した生活適地となっていた。安行台地の川口市呑原遺跡では撚糸文期の竪穴住居跡が2軒調査された。慈恩寺台地に立地するさいたま市諏訪山遺跡（74）からは条痕文期の住居跡約20軒と炉穴3基が調査された。県内最大規模の早期集落である。

縄文時代早期の蓮田台地周辺では、縄文海進に伴う内湾化が進み、蓮田市天神前遺跡、宿下遺跡、堂山公園遺跡、馬込新屋敷遺跡、馬込大原遺跡などで早期後半の炉穴が検出されている。

下総台地の金杉台地では春日部市尾ヶ崎遺跡（44）からは撚糸文系土器群がまとまって出土した。また、権現山遺跡（56）からは茅山上層式の土器が5個体分出土している。

大宮台地南部の浦和支台では大古里遺跡（194）で撚糸文・沈線文・条痕文系土器を始め、100基を超える炉穴群と2軒の住居跡が調査された。北宿西遺跡（193）、明花向遺跡（157）、井沼方遺跡（155）、和田北遺跡（145）、鳩ヶ谷支台では東裏西遺跡（127）など多数の遺跡が形成された。

慈恩寺台地では春日部市花積貝塚（28）がある。前期初頭「花積下層式」の標識遺跡である。縄文前期の関山期～黒浜期にかけて当時の海浜部に貝塚（地点貝塚）が盛んに形成された。蓮田台地では国指定史跡の黒浜貝塚（209）を始め、関山式の標識遺跡である関山貝塚、春日部市貝の内貝塚、風早遺跡、米島貝塚などがある。黒浜貝塚では住居跡51軒、土壌約50基、廃棄貝層5箇所をふくむ広大な集落が確認されている。

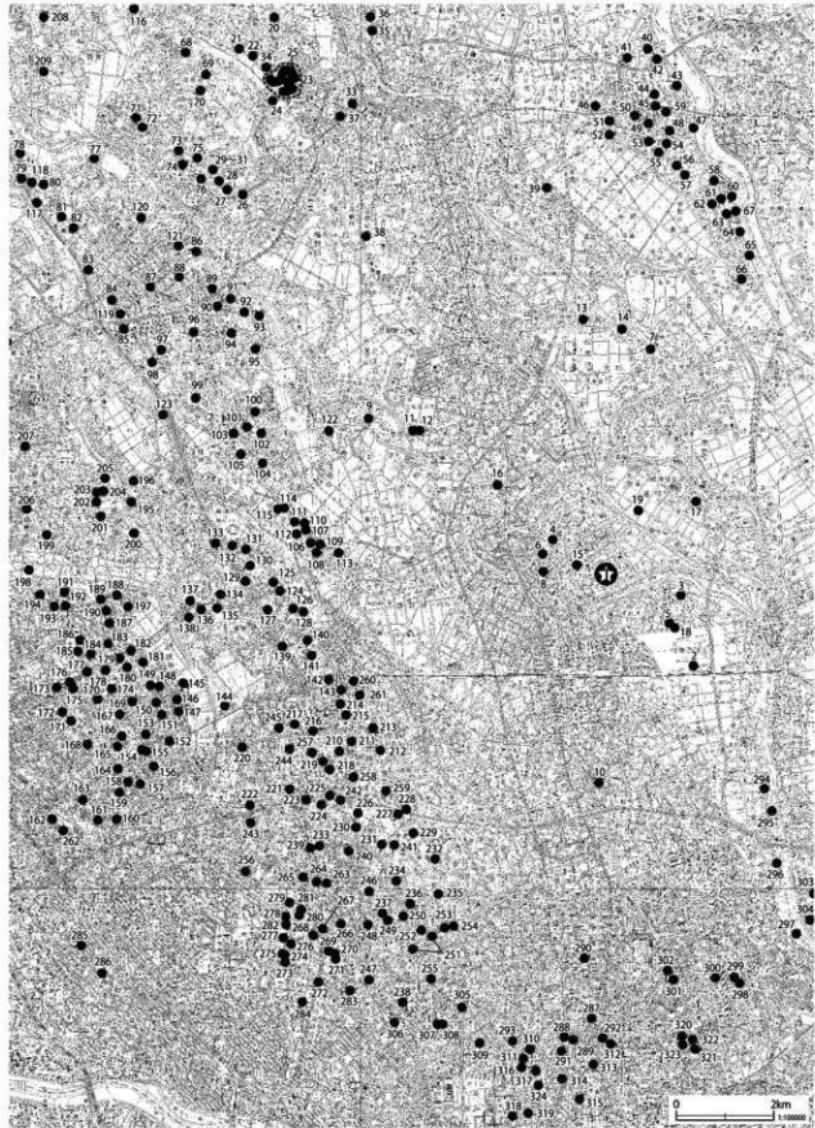
中期になると、海進は終わり貝塚の形成は少なくなるが、大宮台地・蓮田台地では遺跡数が激増

する。生業が海から落葉広葉樹の森に転換し、大規模な環状集落が形成された。大宮台地西部では桶川市諏訪野遺跡、高井遺跡、北本市デーノタメ遺跡などがある。宝珠花台地では春日部市浅間下遺跡がある。浅間下遺跡第4次調査では、竪穴住居跡8軒の他に、小竪穴状構造37基と土壌13基が検出された。

縄文時代後・晩期では綾瀬川右岸の桶川市後谷遺跡、大宮台地南端部ではさいたま市冰川神社遺跡、寿能泥炭屑遺跡、馬場小室山遺跡（190）がある。冰川神社遺跡と馬場小室山遺跡からは環状盛土構造が検出されている。

大宮台地東側の安行台地では大宮台地と対照的に後・晩期の遺跡が多く、貝塚も後・晩期貝塚が最も多く形成されている。川口市石神貝塚（224）と宮合貝塚、猿貝北遺跡（228）などがある。猿貝北遺跡からは晩期終末～弥生時代初頭の土器破片が検出された。

元荒川右岸の蓮田台地（支台）では蓮田市久台遺跡、ささら遺跡、元荒川左岸の白岡台地では蓮田市雅楽谷遺跡（208）がある。蓮田台地南に繋がる岩槻台地ではさいたま市真福寺貝塚（96）、黒谷田端前遺跡（101）が知られている。真福寺貝塚からは後・晩期の集落と低地から泥炭層が検出されている。加須市長竹遺跡は加須低地に位置するが、関東造盆地運動により低地化した遺跡で、本来ローム台地に形成された直径190mの大規模な環状盛土構造と推定されている。下総台地の宝珠花台地（支台）では春日部市神明貝塚がある。神明貝塚は後期掘之内1式～加曾利BII式にかけて造られた馬蹄形貝塚で、令和2年に国史跡に指定された。また、下総台地金杉支台にある春日部市権現山遺跡出土の甕は浮線文系土器に伴う半精製の土器で、晩期終末期（大洞A'式）に平行する段階と考えられる。浮線文系土器群は白岡市前田遺跡、蓮田市久台遺跡、関山遺跡、雅楽谷遺跡、大宮台地の上尾市稻荷台遺跡からも出土している。稻



第3図 周辺の遺跡

第1表 周辺の遺跡一覧

番号	遺跡名	番号	遺跡名	番号	遺跡名	番号	遺跡名		
1	越谷智署前遺跡	66	登元遺跡	131	中野田駒ノ内遺跡	197	上野田驥子遺跡	261	戸塚西台遺跡
2	見田方遺跡	67	南遺跡	132	中野田中原遺跡	198	大道東遺跡	263	寺守町宮第4遺跡
3	No.2遺跡	68	裏慈恩寺遺跡	133	谷ノ前遺跡	199	藤山遺跡	264	里子北谷第1遺跡
4	一番遺跡	69	裏慈恩寺下手遺跡	134	玄番新田本田遺跡	200	A-3遺跡	265	里子瀬内第1遺跡
5	大相模次郎能高館跡	70	人山高地遺跡	135	えんぎ山遺跡	201	原山貝塚	266	鶴ヶ谷福前第1遺跡
6	会田出羽屋敷	71	上野遺跡	136	大崎櫻井前遺跡	203	A-2遺跡	267	辻字宮前第1遺跡
7	清淨院開田塚	72	上野六丁目遺跡	137	大崎北之保遺跡	202	八雲貝塚	268	辻字宮前第2遺跡
8	越ヶ谷御跡	73	諏訪山貝塚	138	大崎東新井遺跡	203	A-1遺跡	269	小浜字瀬沼第1遺跡
9	No.9遺跡	74	諏訪山遺跡	139	西瀬遺跡	204	A-178遺跡	270	小浜字瀬沼第2遺跡
10	備生の一本里塚	75	板山貝塚	140	行谷遺跡	205	A-20遺跡	271	小浜字瀬沼第3遺跡
11	大道第1遺跡	76	南遺跡	141	谷門遺跡	206	見見北遺跡	272	小浜字谷門第1遺跡
12	大道第2遺跡	77	掛貝塚	142	南方遺跡	207	A-86遺跡	273	中居字谷門第1遺跡
13	No.13遺跡	78	馬込三番北遺跡	143	南方西台遺跡	208	雅樂谷遺跡	274	辻字谷門第1遺跡
14	No.14遺跡	79	馬込遺跡	144	四本竹遺跡	209	須田貝塚群	275	辻字谷門第2遺跡
15	No.15遺跡	80	平林寺遺跡	145	和田北遺跡	210	宮合貝塚	276	辻字谷門第3遺跡
16	海道西遺跡	81	西原三遺跡	146	和田南遺跡	211	戸塚三仏寺遺跡	277	辻字谷門第2遺跡
17	増林下前遺跡	82	箕輪東遺跡	147	吉場遺跡	212	戸塚立山遺跡	278	辻字水谷第4遺跡
18	東方西口遺跡	83	西原遺跡	148	梅所南遺跡	213	戸塚5丁目遺跡	279	里子屋敷延第1遺跡
19	増林中妻遺跡	84	加倉遺跡	149	会ノ谷遺跡	214	上田遺跡	280	里子屋敷延第2遺跡
20	竹之下遺跡	85	加倉中島遺跡	150	和田西遺跡	215	行徳往瀬遺跡	281	里子屋敷延第3遺跡
21	立山遺跡	86	石根城跡	151	西谷遺跡	216	野坂塚遺跡	282	里子屋敷延第4遺跡
22	坊菟勾北遺跡	87	岩根城跡・通商館	152	原前遺跡	217	東野遺跡	283	里子瀬沼第1遺跡
23	塙家1-13・15-19号塙	88	太田貝塚	153	大北遺跡	218	石神神代遺跡	284	中居字二鳥第1遺跡
24	塙家14号塙	89	新曲輪遺跡	154	井沼元馬堤遺跡	219	桔木前遺跡	285	越城(前田)
25	塙家東遺跡	90	木曾良遺跡	155	井沼方遺跡	220	木曾呂遺跡	286	越城(前田)
26	花積台地遺跡	91	府内三丁目遺跡	156	井沼方遺跡	221	吼原遺跡	287	金山遺跡
27	花積内台地遺跡	92	村田道下遺跡	157	明花向遺跡	222	八木本遺跡	288	東地蛇田遺跡
28	花積貝塚	93	酒江鉢金遺跡	158	明花東遺跡	223	ト古遺跡	289	鷲鷹遺跡
29	慈恩寺原南遺跡	94	熊原原地遺跡	159	明花南遺跡	224	石神兵塚遺跡	290	西地蛇田遺跡
30	慈恩寺原北遺跡	95	熊原北貝塚	160	円正寺遺跡	225	東町裏遺跡	291	御殿橋荷原遺跡
31	慈恩寺東遺跡	96	真貞寺貝塚	161	太田原貝塚	226	赤山陣屋遺跡	292	仲町沼田遺跡
32	慈恩寺原北遺跡	97	柄崎貝塚	162	小松原山吹遺跡	227	猿貝貝塚遺跡	293	谷塙町東沼田遺跡
33	浜川戸遺跡	98	柄崎中絆遺跡	163	善前南遺跡	228	猿貝北遺跡	294	毛長沼外丘A遺跡
34	坊菟勾北遺跡	99	浮谷貝塚	164	明花遺跡	229	安行鶴家中道來遺跡	295	八條遺跡
35	小瀬山下北遺跡	100	黒谷貝塚	165	とうこのじし遺跡	230	赤山曲輪遺跡	296	六條殿社古墳
36	小瀬山下北遺跡	101	黒谷田端前遺跡	166	東中尾遺跡	231	安行慈林稲荷木遺跡	297	八條輪中遺跡
37	八木崎遺跡	102	黒谷貝塚前遺跡	167	中尾山中島遺跡	232	安行中学校遺跡	298	中島遺跡
38	谷原新田遺跡	103	笹久保宮野遺跡	168	広ケ谷・稻荷遺跡	233	新井宿下一斗薪遺跡	299	幸田氏墓跡
39	沼尾遺跡	104	笹久保スコモ遺跡	169	大間木内水遺跡	234	安行吉岡宮下遺跡	300	鶴鳴塚
40	作之内遺跡	105	笹久保新田井戸遺跡	170	胸形南遺跡	235	新郷貝塚遺跡	301	柳之宮遺跡
41	風早遺跡	106	鈴元上石遺跡	171	不動谷曲輪	236	前野宿貝塚遺跡	302	西袋塚
42	馬場遺跡	107	鈴元高岡東遺跡	172	原山坊	237	赤井舟遺跡	303	米川神社遺跡
43	愛宕遺跡	108	鈴元新田上遺跡	173	不動谷遺跡	238	江戸袋貝塚	304	島根県立敷跡
44	尾ヶ崎遺跡	109	鈴元高岡南遺跡	174	大間木内水北	239	宝藏寺遺跡	305	番匠免遺跡
45	西の宮遺跡	110	鈴元高岡遺跡	175	胸前南遺跡	240	赤山源長寺前遺跡	306	舎人遺跡
46	香取削遺跡	111	鈴元高岡北遺跡	176	胸前遺跡	241	天神山遺跡	307	六ヶ木天神社遺跡
47	大塚遺跡	112	鈴元北山遺跡	177	胸形北遺跡	242	道上遺跡	308	入谷古墳
48	米烏貝塚	113	鈴元上内遺跡	178	胸形遺跡	243	道合上松遺跡	309	米川神社境内遺跡
49	原遺跡	114	尾ヶ崎新田深堀遺跡	179	水深北遺跡	244	中台遺跡	310	古千谷遺跡
50	中屋舗遺跡	115	尾ヶ崎新田深堀西遺跡	180	水深南遺跡	245	古峰神社遺跡	310	伊賀古墳群
51	米烏西口遺跡	116	庭室上宿遺跡	181	梅所遺跡	246	安行慈林下村中遺跡	311	東伊賀遺跡
52	米烏碟山遺跡	117	平林寺遺跡	182	芝原遺跡	247	三ツ和遺跡	312	花畠遺跡
53	吉岡遺跡	118	新堀町	183	松木遺跡	248	浅間山遺跡	313	法華寺境内遺跡
54	房田遺跡	119	加賀洞雲寺境内遺跡	184	南宿南遺跡	249	天神山遺跡	314	白旗荷古墳群
55	中野古岡遺跡	120	龍門町境内遺跡	185	南宿北遺跡	250	東本郷台遺跡	315	延命寺境内遺跡
56	権現山遺跡	121	竹束古墳	186	三室遺跡	251	新郷古墳群	316	伊興遺跡
57	宮前遺跡	122	高曾根中曾根遺跡	187	松木北遺跡	252	東本郷遺跡	317	伊興・和守・狹間遺跡
58	南台遺跡	123	横根池沼遺跡	188	馬場東遺跡	253	宮脇遺跡	318	若宮八幡神社遺跡
59	西の宮古遺跡	124	下野田福荷原遺跡	189	馬場北遺跡	254	高福荷古墳	319	六万部経塚
60	本郷貝塚	125	下野田本村遺跡	190	馬場小山遺跡	255	石御堂遺跡	320	一本松古墳
61	西津洋遺跡	126	東裏遺跡	191	北宿遺跡	256	外谷田遺跡	321	大鷦鷯遺跡
62	前田遺跡	127	東裏西遺跡	192	北宿南遺跡	257	海道西遺跡	322	大鷦鷯神社境内古墳
63	浅間東遺跡	128	大門貝塚	193	北宿西遺跡	258	西立野道上遺跡	323	白山保古墳
64	作谷津遺跡	129	鰐巻遺跡	194	大古里遺跡	259	西立野・古崎遺跡	324	経塚古墳
65	栄光院貝塚	130	中野田島ノ内遺跡	195	上野田西台遺跡	260	一本木遺跡		

1~19 越谷市、20~59 春日部市、60~67 松伏町、68~207 さいたま市、208~209 莲田市、210~294 川口市、285~296 藤沢市、287~293 加古市、294~304 江津市、305~324 立正区

荷台遺跡では晩期終末の土偶が出土し注目される。

弥生時代

弥生時代中期の遺跡は、蓮田台地・岩槻台地等台地縁辺部に点々と形成されたようだ。元荒川左岸の慈恩寺台地南端に位置するさいたま市南I遺跡からは、中期中葉須和田期後半の住居跡が7軒検出された。南II遺跡から同時期の壺型土器が土壙から出土した他、諏訪山遺跡（74）からも須和田式土器後半または宮ノ台式土器が出土している。

春日部市（旧庄和町）須金遺跡は中川低地にあり、庄内古川左岸の自然堤防上に立地する。前述した柿沼のいう「渡良瀬一古隅田一元荒川ルート」に沿う遺跡で、中期中葉の（須和田期）の11基の再葬墓から17点の土器が検出された。残念ながら骨や副葬品は検出されなかったが、中川低地唯一の再葬墓遺跡である。再葬墓としても最終段階と推定され、次の段階には稻作文化の墓制である方形周溝墓が伝わると考えられている（柿沼2021）。春日部市谷原新田遺跡からは中期須和田式後半の壺型土器が不時発見された（38）。遺跡の性格は不明であるが古利根川や元荒川の自然堤防から外れた低地に位置し、未知の自然堤防に立地した可能性がある。須和田期には台地縁辺部と共に、低地に進出した集団があったと推定される。

中期後半の宮ノ台期では、元荒川に面した岩槻台地に掛貝塚（77）があり、宮ノ台期の住居跡が検出された。同じ岩槻台地上では西原遺跡（83）、馬込遺跡（79）から宮ノ台期の住居跡が発見されているが集落規模は比較的小さいようだ。大宮台地の旧浦和地区では安行台地（鳩ヶ谷支台）に上野田西台遺跡（195）、浦和支台に北宿遺跡（191）、松木遺跡（183）、大北遺跡（153）、明花向遺跡（157）などで宮ノ台期の集落が検出されている。上野田西台遺跡からは16軒の住居跡と挿入石斧や鉄製鎗が出土した。明花向遺跡では住居跡7軒、方形周溝墓3基と集落を囲む環濠が検出され、川口市戸塚上台遺跡（214）からは宮ノ

台期古段階の住居跡が1軒検出された。

弥生時代後期前半の遺跡様相は不明確である。周辺地域で遺跡が増加するのは後期後半～古墳時代初頭である。岩槻台地では木曾良遺跡（90）から環濠を伴う弥生町期の住居跡17軒が調査された。平林寺遺跡（80）では東海西部地方の影響を受けた壺や畿内周辺のタタキ技法を持つ甕が出土した。大宮台地浦和支台ではさいたま市中里前原遺跡、中里前原北遺跡、上太寺遺跡、馬場北遺跡（189）、井沼方遺跡（155）などがある。井沼方遺跡は県内最大規模の環濠集落で、集落と方形周溝墓群が検出されている。方形周溝墓の主体部から鉄劍とガラス玉が出土した。中里前原遺跡・中里前原北遺跡、馬場北遺跡も環濠集落である。大宮台地先端部の安行台地では七郷神社裏遺跡・東本郷遺跡（252）がある。この時期には台地上の集落が圧倒的に多いが、荒川低地の自然堤防上にも集落が進出するようになる。戸田市鍛冶屋・新田口遺跡、五関中島遺跡、上大久保新田遺跡、神田天神後遺跡などがある。鍛冶屋・新田口遺跡は弥生町期～古墳時代前期の方形周溝墓群と捉えられてきたが、方形周溝墓とされてきた中の一定数は「周溝を有する建物跡」との認識が有力となっている（福田2001）。

古墳時代

古墳時代前期では下総台地杉木支台上に位置する春日部市権現山遺跡から古墳時代初頭の住居跡4軒と方形周溝墓1基が検出されている。方形周溝墓からは焼成前穿孔の壺が11点出土し、学史的にも有名な遺跡である。尾ヶ崎遺跡からは古墳時代初頭の住居跡が15軒検出された他、香取廻遺跡（46）から東海東部系の大廓式土器が出土した。搬入品の可能性が指摘されており注目される。

大宮台地では、弥生時代後期～古墳時代初頭の遺跡は多数営まれるが、古墳時代前期以降の遺跡は極端に減少し、集落や古墳は大宮台地西部の荒川低地側に一斉に移動し、遺跡（集落）の再編が

図られたようにみえる。

綾瀬川流域では、鳩ヶ谷支台のさいたま市下野田稲荷原遺跡（124）、下野田本村遺跡（125）、東裏遺跡（126）など多くの遺跡が形成される。東裏遺跡では方形周溝墓を伴う。

中川低地の古墳前期の遺跡としては越谷市増林中妻遺跡（19）が発見された。増林中妻遺跡は越谷警察署前遺跡の北側、元荒川左岸の低湿地に位置する。島状に残った元荒川の自然堤防上に立地すると推定されている。台付甕と壺、高坏片が出土しており（菟原・鬼塚2000）、台付甕は弥生時代終末期の前野町式的な特徴を留めているようだ。

元荒川・綾瀬川下流域及び毛長川流域の自然堤防上には古墳時代初期を画期として一斉に集落が営まれたようで、草加市東地総田遺跡（287）、蜻蛉遺跡（288）、毛長沼外瓦A遺跡（293）、川口市三ツ和遺跡（247）、八潮市八條遺跡（294）などがある。蜻蛉遺跡からは古墳時代前期の方形周溝墓が3基検出された。東地総田遺跡からは方形周溝墓と思われる溝跡と周溝付き建物跡、「異形器台」が、毛長沼外瓦A遺跡からは古墳時代前期末葉から中期（和泉期）にかけての溝跡が発見されている。毛長川右岸の東京都足立区には祭祀遺跡として著名な伊興遺跡（316）や古墳時代前期の周溝墓群や奈良時代の集落である舍人遺跡（305）などが位置する。川口市高橋荷古墳（254）は大宮台地最南端の独立丘陵上に位置する。残念ながら大きく破壊されているが、全長75.0m、埼玉県南部では最大規模の前方後円墳で、荒川河口部の沖積地に広がる集落を睥睨していた筈である。5世紀前半以前の築造と推定されている（川口市1986）。

古墳時代中期の大宮台地には白鍬塚山古墳が出現在する。埴輪から5世紀後半の築造とされている。大宮台地南部には中期集落は少なく、白鍬宮腰遺跡、札ノ辻遺跡、旧浦和市の別所遺跡、芝川右岸の水深北遺跡（179）がある。白鍬宮腰遺跡・八王子殿の前遺跡は、古式須恵器が出土している。

古墳時代後期には大宮台地西縁部や荒川低地の自然堤防上に集落や古墳群が形成される。根切遺跡、水判土壙の内遺跡、白鍬古墳群、側ヶ谷戸古墳群、大久保古墳群などがある。大宮台地南部の浦和支台周辺では、前期以来の集落の減少傾向が続いている、馬場東遺跡（188）や北宿遺跡（191）などに限られている。

下総台地金杉支台に乘る松伏町本郷貝塚（60）からは後期6世紀後葉～7世紀初頭とされる住居跡が2軒検出されている。浅間東遺跡（63）、前田遺跡（62）でも古墳時代中期～後期の住居跡が調査された。

中川低地では、越谷市見田方遺跡（2）が代表的な集落遺跡で、古墳時代後期の住居跡2軒、遺物包含層などが検出された。元荒川右岸の低地に位置し、おそらく元荒川の島状に分断された自然堤防ではないかと思われる。時期は後期（鬼高二期）と報告されている。古式須恵器の趣があり、5世紀後半～6世紀頃にかけて営まれた集落であろう。川口市石御堂遺跡（255）は大宮台地を降りた中川低地の自然堤防上に位置し、鬼高二期の土壙が1基検出されている。

古墳は川口市の新郷古墳群、草加市蜻蛉遺跡の円墳、足立区伊興古墳群、白旗塚古墳群、白山塚古墳などが知られている。集落の様相は不明確であるが、古墳群に対応する集落が存在したと考えられる。

奈良・平安時代

該期には再び大宮台地上に遺跡が増加する。大宮台地西縁部を流れる鴨川沿いの自然堤防上に立地する水判土壙の内遺跡、林光寺遺跡、根切遺跡からは古墳時代後期～奈良・平安時代の住居跡が多数検出されている。また、大久保領家道場寺院跡などから瓦の出土が報告されており、古代寺院の存在が想定されている。古代足立郡の中心地の一つであり、根切遺跡からは畿内産土師器が出土しており（富田2002）、漆貯蔵容器の出土も確認

され、大久保庵寺を含めた鴨川沿いの遺跡は初期足立郡家の有力な候補地の一つと考えられている(水口1998)。芝川右岸の大宮台地(大宮主台)には氷川神社東遺跡がある。延喜式内社の氷川神社に隣接する遺跡で、9世紀後半から11世紀初頭にかけての住居跡36軒、小鍛冶・鋳造関連竪穴遺構、総柱建物跡4棟などと鉄製口琴や小金銅仏、銅鏡、石帶、二彩陶器などが出土している。氷川神社に関連する遺跡であるが、同時に平安時代の足立郡家の比定地でもある。

鳩ヶ谷支台には下野田稻荷原遺跡、下野田本村遺跡、東裏遺跡などがあるが、小規模な集落が多い。下野田稻荷原遺跡では9世紀後半の住居跡が6軒調査され、須恵器に伴ってロクロ土師器壺類の出土が目立った。浦和支台では和田北遺跡(145)、大和田片柳支台の東北原遺跡、御歳中山遺跡ではロクロ土師器を生産した土師器焼成坑が検出された。和田北遺跡ではロクロビットをもつ工房が検出されている。浦和支台では大間木内谷遺跡(169)、駒形遺跡(178)、駒前遺跡(176)、北宿遺跡(191)、宮前遺跡(152)など多数の遺跡が営まれた。

川口市内では猿貝北遺跡(228)から平安時代の製鉄炉が、吠原遺跡では武藏型甕や須恵器短頭壺を蔵骨器とした火葬墓21基検出された。9世紀前半～後半にかけて営まれた火葬墓である。安行中学校遺跡(232:久保遺跡)からは土師器南武藏型壺に「足」と記された墨書き器が4点出土し、「足立郡」を意味したものではないかと指摘されている(川口市1986)。

綾瀬川左岸の自然堤防上には釣上碇遺跡(106)がある。平安時代の溝跡や土壙が検出され、自然堤防を利用した冲積地の開発が進展したようだ。

江戸川右岸、金杉台地に位置する松伏町本郷貝塚からは平安時代の集落が検出され、南北企窓跡群・產須恵器、新治窓跡・產須恵器、武藏型甕、常総型甕、ロクロ土師器等周辺各地の土器が搬入されていた。

中川低地では、元荒川流域の自然堤防上の右岸にさいたま市(旧岩槻市)高曾根中曾根遺跡(122)、左岸の越谷市大道第1遺跡(11)、大道第2遺跡(12)がある。大道第1・第2遺跡からはロクロ土師器焼成坑5基と竪穴住居跡8軒が検出された。元荒川(中川)右岸の自然堤防上に立地する八潮市八條遺跡では、平安時代の住居跡が5軒、土壙62基、井戸跡2基などが検出されている。武藏・下総・常陸・利根川流域など各地の土師器・ロクロ土師器、須恵器が出土した。草加市蛸蛇遺跡からは9世紀後半頃の井戸跡2基、土壙4基が検出された。

中・近世

中・近世の遺跡の調査例は非常に少なく、遺構・遺物という考古資料からその歴史を辿るのは難しい。ここでは越谷市とその周辺地域の資料を紹介するにとどめたい。まず、越谷市御殿町には建長元年(1249)銘の板碑が残る。高さ155cm、幅56cmの越谷市内で最古・最大の板碑である。板碑造立初期段階のもので、埼玉県東部地区でも最古段階の資料である。越谷市内における中世段階の考古資料は越ヶ谷御殿跡(8)から少量出土している。越ヶ谷御殿跡は慶長9年(1604)徳川家康の求めに応じて、在地の土豪会田出羽の屋敷を放鷹時の宿泊所として設営された跡とされている。発掘調査によって鎌倉時代の龍泉窯系青磁、元徳三年(1331)・長禄四年(1460)の板碑等中世段階の遺物と、近世(18世紀主体)の陶磁器を伴う溝跡・井戸跡・土壙などが発見されており、御殿跡そのものは発見されていないが、中世から近世にかけての様相が徐々に判明しつつある。

松伏町では下総台地上の作谷津遺跡(64)から13世紀後半～14世紀前半の青磁・常滑焼・非ロクロ成形のかわらけが出土している。八潮市八條遺跡(294)は中川右岸の自然堤防上に位置する遺跡で、12世紀後半～13世紀前半の非ロクロ成形のかわらけや中国産青磁・白磁が出土し、河川交通の要衝として機能したと推定されている。

III 遺跡の概要

越谷警察署前遺跡は埼玉県南東部の越谷市東越谷に所在し、東武伊勢崎線越谷駅から北東へ約1.7kmの位置にある。遺跡は中川低地を北西から南東方向に蛇行しながら貫流する元荒川左岸の自然堤防上に立地し、標高は約4.0mである。元荒川は調査区の南約500mを東流している。微地形を見ると、調査区北側の標高は2.7~3.4m、南側のそれは3.5~3.6mと、遺跡は高低差の少ない自然堤防の頂部付近に位置することがわかる（第5図）。

越谷市には現在19箇所の遺跡が確認されている。最も古い遺跡は増林中妻遺跡で、弥生時代終末～古墳時代前期初頭の遺物が出土している（菅原・鬼塚2020）。古墳時代後期の見田方遺跡では堅穴住居跡が2軒検出され、土師器、須恵器等の生活用具が出土した（越谷市教育委員会1971）。また、奈良・平安時代の遺跡は大道第1・第2遺跡が調査され、平安時代の住居跡8軒、掘立柱建物跡4棟、土器焼成坑5基、土壙15基等が検出された（越谷市教育委員会2016）。

中世の遺跡は市内では3遺跡と少ないが、約130基存在している板石塔婆の存在は未発見の遺跡が相当数存在すると考えられている。

近世では、越谷は日光道中三番目の宿場として栄え、慶長九年（1604）徳川家康の求めにより越ヶ谷御殿が建てられた。しかし、明暦三年（1657）の明暦の大火で江戸城が焼失した際、越ヶ谷御殿が將軍の居城として江戸城二の丸に移

され、その後は畠地となったとされている。越ヶ谷御殿跡の発掘調査では、18世紀に埋没したと考えられる溝跡や土壙、井戸跡等が検出された（越谷市教育委員会2017）。

遺跡の所在する東越谷は、昭和46年の区画整理に伴う町名変更による地名で、越ヶ谷、花田、瓦曾根、東小林の各一部を編入して成立した。遺跡は東小林村にあたり、明治12年までは小林村であった。『新編武藏風土記稿』では小林村には現存する東福寺、神明社、香取社が記されている。

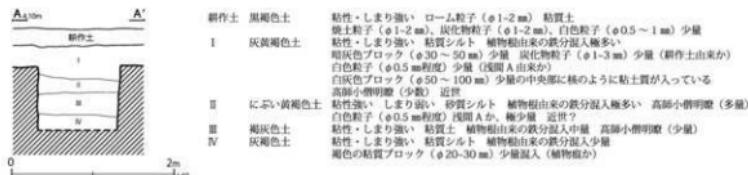
越谷警察署前遺跡第1次の調査は、調査を2回に分け、前半は西側調査区（A区）、後半は東側調査区（B区）の調査を行った。両調査区にまたがる中央付近は搅乱が激しく、全体の7割程度が搅乱で、遺構を検出できたのは西側調査区の北半と、東側調査区の東端のみであった。

基本土層は、A区東壁（B-2グリッド）で観察した。約20cmの耕作土の下に粘性の強いシルト質土壙が堆積していた（第4図Ⅰ～IV層）。

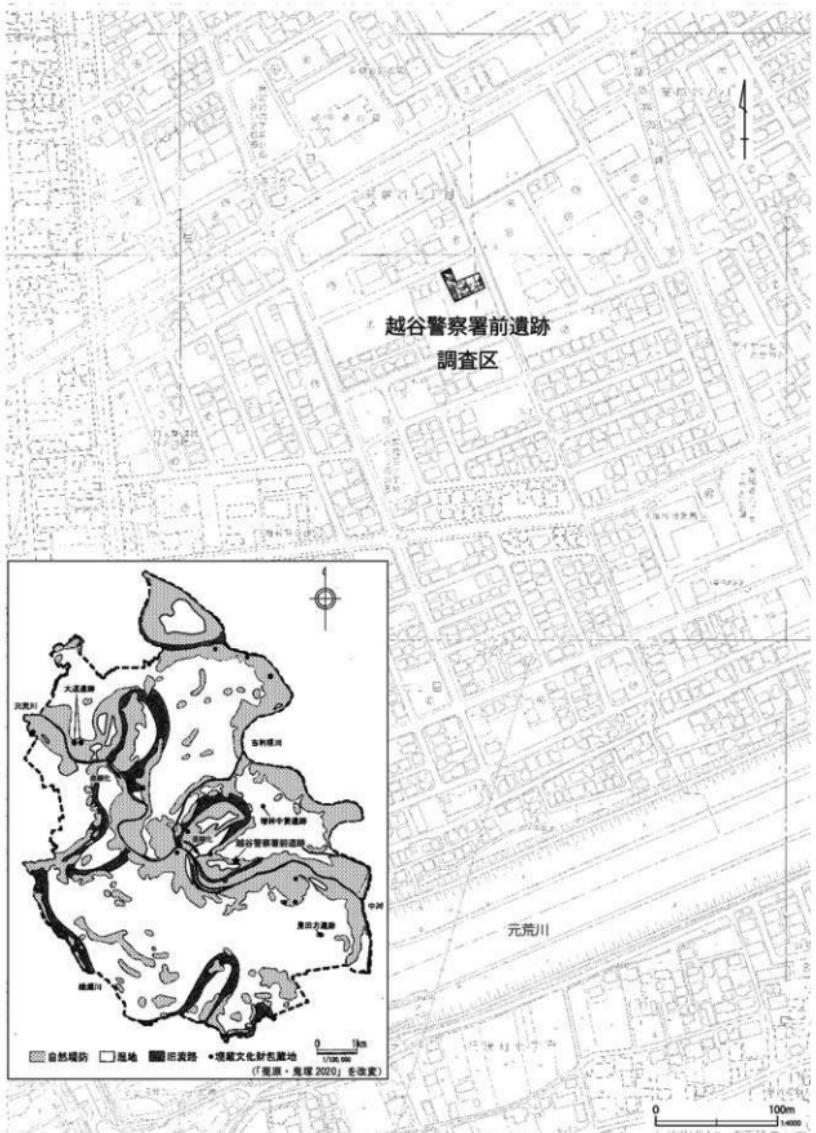
第I層は浅間A輕石かと思われる白色粒子が少量含まれ、近世の堆積層と思われる。

第II層はにぶい黄褐色土で、白色粒子が極少量含まれていた。浅間A輕石の可能性もあるが特定はできなかった。近世の堆積土の可能性がある。

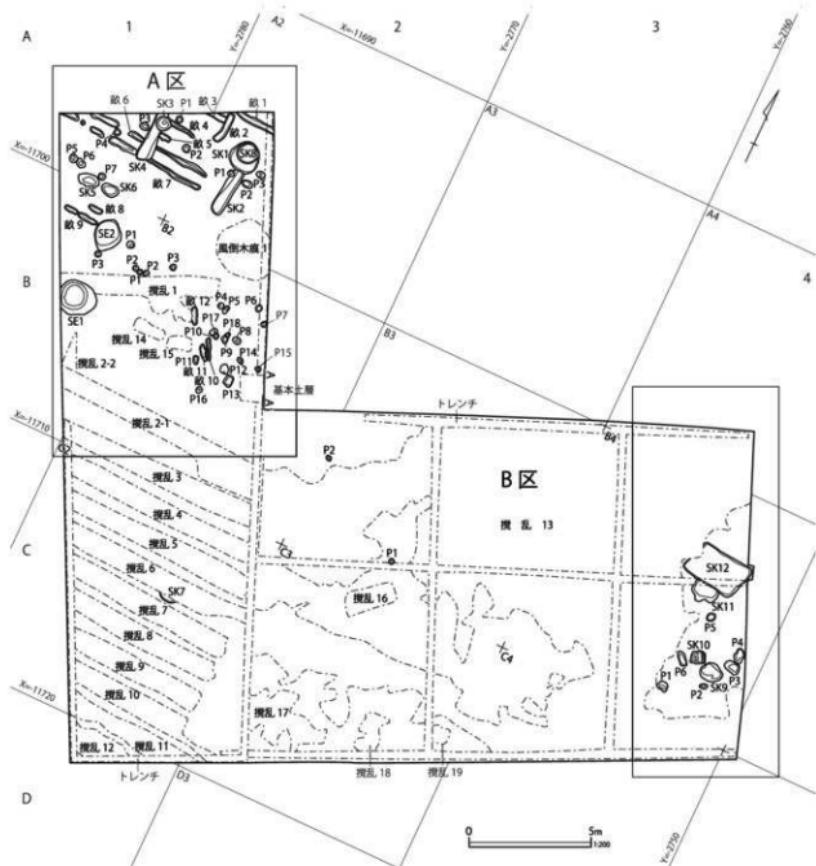
第III層・第IV層は褐灰色土・灰褐色土で、第IV層には褐色の粘質ブロックが混入していた。第IV層以下は湧水のため掘削できなかった。平安時代の遺構確認面は第III層乃至第IV層と思われるが、



第4図 基本土層図



第5図 越谷市の地形と遺跡位置図



第6図 全体図

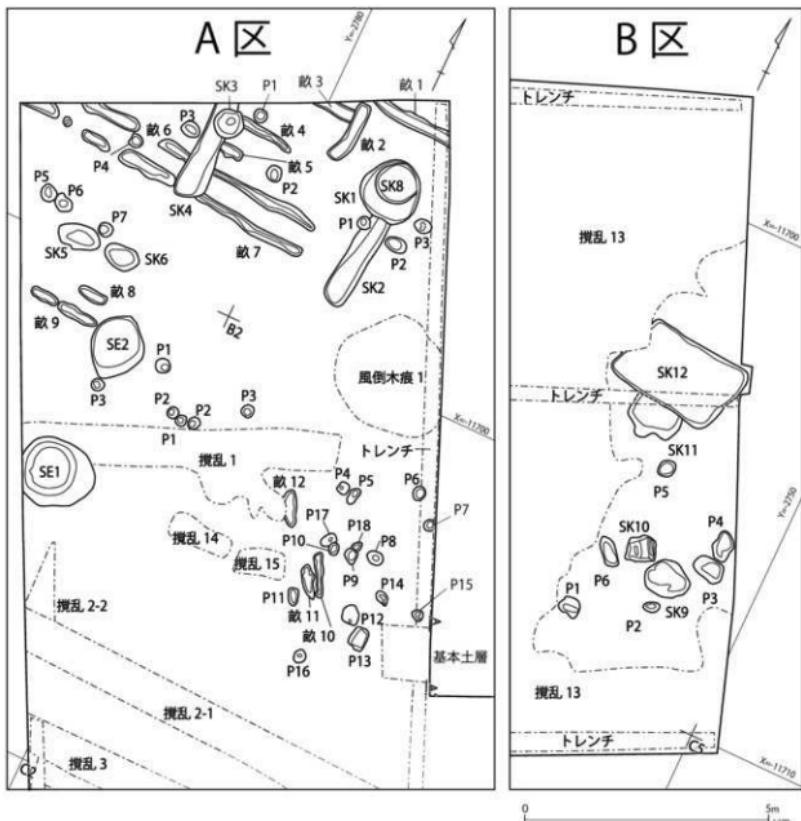
擾乱の影響もあり不明瞭であった。

今回の調査で発見された遺構は、平安時代の土壙1基、近世の井戸跡2基・土壙11基・畝状構12条・ピット39基である。また、ピットから弥生時代～古墳時代前期頃と思われる土器片が発見された。口縁部内面に一段の小さな折り返しが付き、ハケ目調整される。器形・径が不明だが、市内で最古段階の土器となる可能性がある。残念ながらピットそのものは近世以降のものと思われる。

平安時代の第11号土壙には焼土が多く含まれ、鉄製石が出土したが、鍛冶炉や楕円津は検出されなかった。底面の被熱も確認されなかった。須恵器甕や土師器甕、ロクロ土師器坏の破片が出土した。9世紀後半頃の遺構と考えられる。

近世の第1・8号土壙からは17世紀後半～18世紀頃の陶磁器が、第12号土壙からは18世紀～19世紀初頭の陶磁器片や焰烙が出土した。

井戸跡は2基近接して検出された。湧水が激し



第7図 全体図（部分）

く完掘できなかったが、17世紀後半～18世紀前半の陶磁器が出土した。

歓状遺構は西側調査区で検出された。東西方向に走るものが多くみられた。遺物の出土がほとんどなく時期は不明確であるが、僅かな出土遺物と堆積土に含まれる浅間山由来と思われる火山灰（浅間A軽石）の存在から18世紀後半またはそれ以降につくられた畑の歓跡と推定される。

今回の発掘調査によって、平安時代の生活の痕跡が発見された。周辺に大道遺第1遺跡・大道第2遺跡と同様、元荒川の自然堤防上にほぼ同時期の集落の存在が確実視された。

また、近世においては、日光道中越谷宿からや離れた地点で江戸時代前期から中頃の生活跡が確認された。地域の歴史を辿るうえで大きな成果といえよう。

IV 遺構と遺物

1 平安時代の遺構と遺物

(1) 土壙

第11号土壙 (第8図)

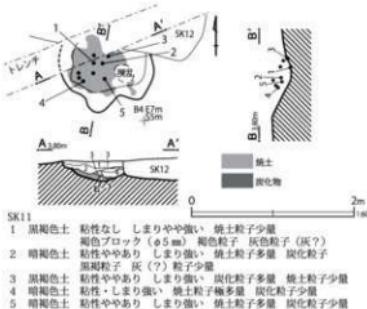
第11号土壙は調査区東端のB-4グリッドに位置する。北側は第12号土壙に埋設されていた。平面形態は円形を基調とする不整形と思われる。規模は長軸長1.10m、短軸残存長0.86m、深さ0.25mである。底面は皿状に中心部に向かって緩やかに窪んでいる。覆土は5層に分層され、覆土下層の第2層、第4・5層には焼土が多量に含まれていた。また、第3層には炭化物粒子が多量に存在した。焼土は浮いた状態で検出され、底面や側壁の被熱は認められなかった。

出土遺物は少なく、ロクロ土師器壺、土師器甕、須恵器甕、鉄製品、石製品が出土した(第9図)。

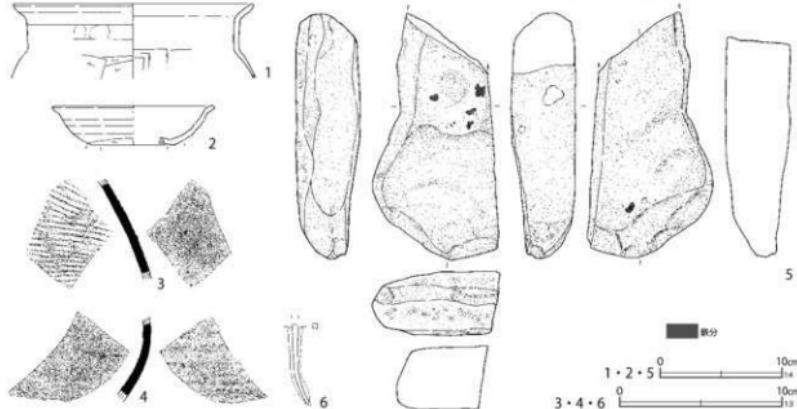
第9図1は武藏型の土師器甕である。いわゆる「コ」の字状口縁甕で、頭部は直立する。2はロクロ土師器無台壺である。口縁部は外反し、全体に扁平で底部は大きい。底部は回転糸切りされ、体部下端と底部外縁部は手持ちヘラケズリで調整

されている。3は須恵器甕で、外面平行タタキで自然釉が垂れる。内面は平滑で摩滅している。あるいは転用硯の可能性もある。4は須恵器長頸瓶頸部片と思われる。外面には自然釉が付着する。紫灰色で東金子産の可能性がある。

5は石製品で、図上で上面を除いた各面が摩滅している。特に表面と裏面には直径0.5~2.0cm大的鉄粒が数箇所残る。右側面は破面であるが、使用痕が残っている。石材は硬質砂岩と思われる。



第8図 第11号土壙



第9図 第11号土壙出土遺物

第2表 第11号土壌出土遺物観察表（第9図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	土師器	甕	(19.6)	6.1	—	CIL	15	良好	にぶい楕	No 8 武藏型甕	
2	ロクロ土師器	杯	13.0	3.2	7.0	ADGHI	20	良好	浅黄褐色	No 24・B-4Gr 底部回転角切り 体部下端+底部外縁手持ちヘラケズリ	4-1
3	須恵器	甕	—	6.2	—	DK	5	良好	灰	No 9 胸部片 外面平行叩き 白灰色自然釉 内面摩減し平滑 施釉不均 転用板?	
4	須恵器	長頸瓶	—	5.1	—	DI	10	普通	赤灰	No 1 紫灰色 東金子産か SK12-9と同一か 硬質砂岩 上面は欠損 侧面と裏面は破面 使用痕 鉄分が付着している	4-2
5	石製品	鉄床石	長さ[20.1]	幅[10.4]	厚さ5.2	重さ1400.02					
6	鉄製品	釘	長さ[4.9]	幅[0.3]	厚さ0.3	重さ4.5					6-12

重量は1400.02gで、重量感がある。鍛冶作業に使用された鉄床石と考えられる。土壌覆土中に焼土が多く含まれていたが、鉄滓は検出されていないため、第11号土壌を鍛冶炉とみることはできないが、二次的に投棄された可能性があろう。

2 近世以降の遺構と遺物

(1) 井戸跡

第1号井戸跡（第10図）

第1号井戸跡はA区北寄りのB-1グリッドに位置する。平面形態は梢円形で、規模は長径160m、短径145m、深さは1.26m以上となるが、湧水が激しく掘削は断念した。

素掘りの井戸跡と考えられ、覆土は8層に分層された。灰褐色シルト質土が主体であった。第6・7層が井筒部分に相当する可能性がある。

出土遺物は少なく、擂鉢と鉄製品を図化した（第11図）。それ以外には肥前系磁器の染付碗皿類

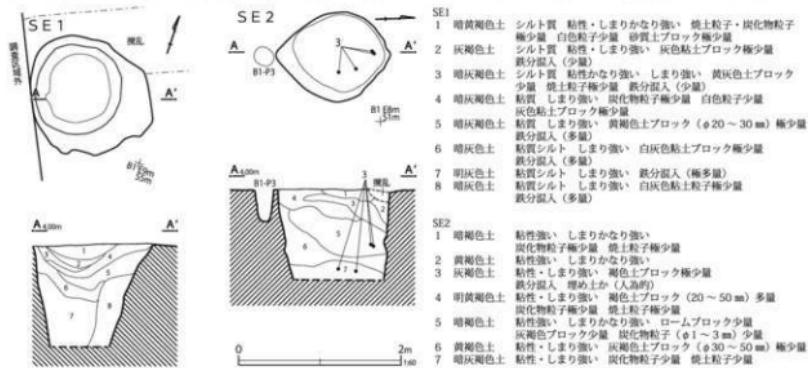
また、ロクロ土師器焼成坑の可能性も考えられたが、底面の被熱面が確認できなかった。第11号土壌の時期は9世紀後半（3/4期）頃と考えられる。6は鉄釘茎部片で、断面は方形である。

の細片、外面に柿釉を施釉した瀬戸美濃系擂鉢、かわらけ小皿の細片が出土している。

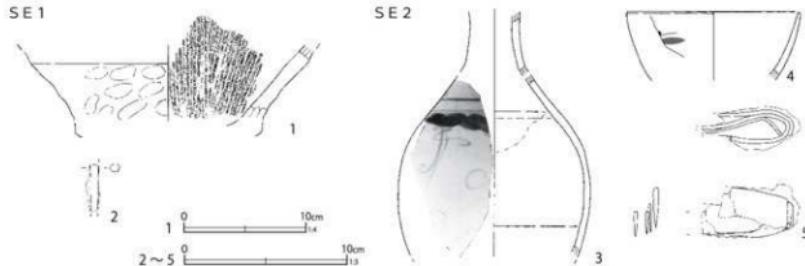
第11図1は丹波系陶器擂鉢である。体部下位の破片で、外面は指頭による押さえの後、ヘラナデ状の整形痕が見える。内面は櫛齒状工具による擂目が施される。2は丸棒状の鉄製品である。出土遺物から17世紀後葉～18世紀前葉にかけて使用されたと推定される。

第2号井戸跡（第10図）

第2号井戸跡はA区北寄りのB-1グリッドに位置し、第1号井戸跡の北側約2mにある。



第10図 第1・2号井戸跡



第11図 第1・2号井戸跡出土遺物

第3表 第1・2号井戸跡出土遺物観察表（第11図）

番号	種別	器種	口径	高さ	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	回版
1	陶器	擂鉢	—	[6.2]	—	DEGL	10	良好	明赤褐	丹波系 クシ衝による植目 外曲面鉄正直 17c 後葉~18c 前葉	4-3
2	鉄製品	不明		長さ [2.9]	幅0.5		厚さ0.5	重さ2.3			6-12
3	磁器	瓶(壺形)	—	[15.1]	—	K	15	良好	白	No.2・3 肥前系 磁付 施釉 接合しない7片からなる 17c 後葉	4-4
4	磁器	碗	(10.6)	[4.2]	—	K	10	良好	白	肥前系 施釉 外面一部色絵(赤・緑)残る 17c 後葉	4-5
5	鉄製品	小刀		長さ [5.6]	刃幅2.0	背幅0.2	重さ40.2			3枚重ね	6-12

平面形態は梢円形で、規模は長径1.40m、短径1.10m、深さ1.11m以上となる。底面は湧水のために掘削を断念した。

覆土は7層に分層された。第1号井戸跡に比較して、上層を中心に不自然な堆積が観察された。特に第3層は人為的な堆積土の可能性がある。

出土遺物は少ない。磁器壺形と碗、鉄製品を図化した（第11図3～5）。それ以外にはかわらけ皿と土師質土器細片が出土している。

第11図3は肥前系磁器の壺形である。接合しない破片が7片ある。頸部内部と胴部外面には透明釉が施釉され、外面には染付文が描かれている。

4は肥前系磁器碗である。外面には赤と緑（？）の色絵の痕跡が確認できる。5は鉄製の小刀と思われ、3枚折れ曲がった状態で出土した。

肥前系磁器は17世紀後葉のもので、第1号井戸跡の擂鉢は17世紀後葉～18世紀前葉と時期幅としてはやや新しい時期（18世紀前葉）を含む。第2号井戸跡に人為的な埋め戻しが想定され、第1号井戸跡は自然堆積風であった。第2号井戸跡から第1号井戸跡に掘り直された可能性もある。

（2）土壤

第1号土壤（第12図）

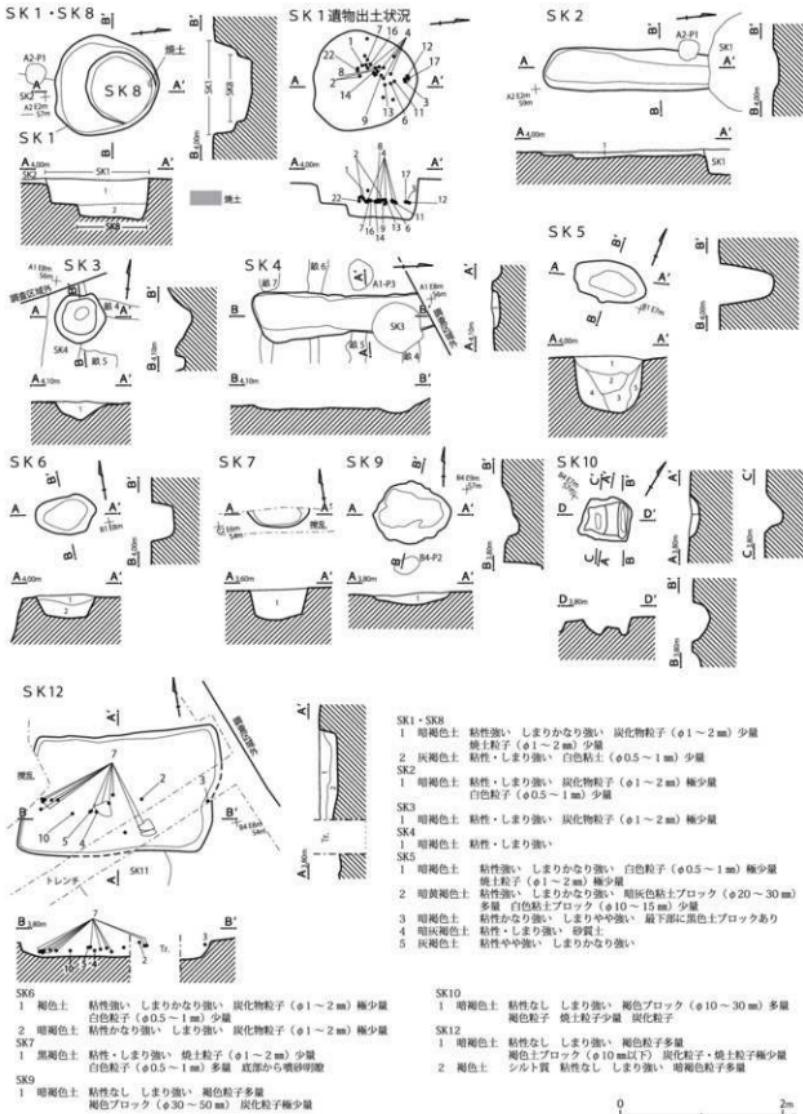
第1号土壤はA-2グリッドに位置する。第2号土壤・第8号土壤と重複し、最も新しい。第8号土壤は第1号土壤直下に位置し、同一土壤の可能性がある。

平面形態は円形で、規模は長径1.27m、短径1.23m、深さ0.32mである。底面は鍋底状で壁は直立する。覆土は暗褐色で、粘性、しまりは強い。

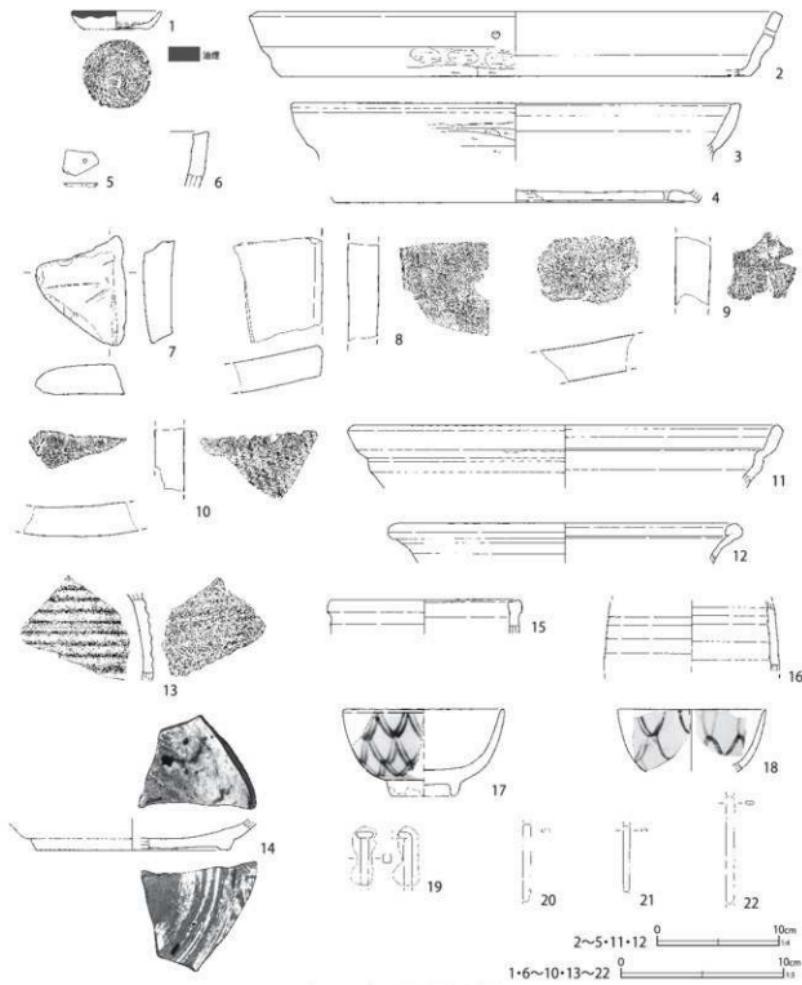
出土遺物は瀬戸美濃系の擂鉢・鉢、焙烙、瓦、かわらけ小皿等の小片が底面付近からまとまって出土した。

第13図1はかわらけ小皿である。底部は回転糸切りで、口唇部には油煙が付着する。2・3は瓦質土器焙烙で焼されている。体部下端は軽くヘラケズリされる。2は指頭痕状に緩く凹み、横方向の亀裂が観察される。4・5は土師質土器焙烙で底部に二次穿孔される。6も土師質土器焙烙で金雲母が多量に含まれ、常陸産と考えられる。

7～10は棟瓦である。7は瓦片を砥具に転用したものか。表裏・側壁は摩滅し、刃跡と思われる線状痕が残る。



第12図 第1～10・12号土壤



第13図 第1号土壤出土遺物

11・12は瀬戸美濃系陶器播鉢である。11は播鉢I類で柿軸が施釉される。18世紀前葉に比定される。12は口縁部が玉縁状に肥厚する播鉢II類で、17世紀後葉頃のものであろう。13は丹波系の陶器甕胴部である。外面はロクロ目が顕著である。外

面は紫灰色、内面は茶褐色でタール状の有機物が付着する。17世紀中葉～18世紀後葉には納まるものと思われる。14は瀬戸美濃系の陶器鉢である。いわゆる「笠原鉢」と思われ、内面に緑釉、外面に長石釉と緑釉が施釉されている。17世紀後半～

第4表 第1号土壤出土遺物観察表（第13図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	かわらけ	小皿	5.4	2.1	4.0	CHL	95	良好	橙	No.6 底部回転糸切り 口唇部に油煙付着(3ヶ所)	4-6
2	瓦質土器	倍格	(42.6)	5.3	(38.6)	CDI	10	普通	灰白	No.9・18 煙付 二次穿孔(1孔) 砂目底か側面ナデ、軽いケズリ 接合しない2片あり	
3	瓦質土器	倍格	(36.6)	[4.7]	—	CDGHI	5	普通	淡黄	No.21 体部外表面ケズリ 植付	
4	土師質土器	倍格	—	[1.1]	(30.0)	CDGI	35	普通	浅黄褐	No.5・7・15・16・17 底部に二次穿孔(1孔)あり 手吊剥落少、底面堅状斑 接合しない破片1片あり	
5	土師質土器	倍格	—	—	—	CDI	5	普通	橙	底部二次穿孔 砂目底か	
6	土師質土器	倍格	—	[2.4]	—	ADGI	—	普通	明赤褐	No.20 金雲多 常陸産と思われる 硬く焼き結まる	
7	瓦	桟瓦 (軒用具)	長さ[6.2]	幅[5.5]	厚さ1.8	CDGI	—	良好	灰	No.2 瓦軒用具 凸面を利用 刃先状鋸歯と研磨面(底面)残す	4-7
8	瓦	桟瓦	長さ[6.4]	幅[5.5]	厚さ2.0	CK	—	—	灰	No.8 粉っぽい土 素地土は灰白色で軟質	
9	瓦	桟瓦	長さ[4.0]	幅[6.0]	厚さ2.0	CDI	—	普通	灰	No.14 素地土は灰白色で軟質	
10	瓦	桟瓦	長さ[5.0]	幅[6.1]	厚さ1.8	CDI	—	良好	灰	平滑 光沢あり	
11	陶器	擂鉢	(35.0)	[5.1]	—	CIK	5	普通	淡黄	No.22 濱戸美濃系 施釉(枯葉) 濱戸編年登場鉢 鋼1類(第6小期)と思われる 18c前葉	4-8
12	陶器	擂鉢	(28.0)	[3.3]	—	IK	5	普通	浅黄	No.25 濱戸美濃系II類 鉄袖 濱戸編年登場第2段 鋼第4小期～第5小期 17c後葉	4-9
13	陶器	甕	—	[6.5]	—	DEGI	5	普通	浅黄褐	No.21 丹波系 内外面鉄袖か 黄褐色 外面ロクロ 強目強い 17c中葉～18c後葉	4-10
14	陶器	鉢	—	[1.9]	(11.8)	DI	15	良好	灰黄	No.13 濱戸美濃系 底部回転ヘラケズリ 灰釉施釉 高台低い 空原形 接合しない2片	4-11
15	陶器	香炉	(11.6)	[2.1]	—	K	5	普通	淡黄	浜戸美濃系 灰釉施釉 簡形香炉と思われる	
16	陶器	徳利	—	[4.3]	—	IK	10	良好	淡黄	No.3 濱戸美濃系 灰釉施釉	
17	磁器	碗	(9.7)	5.3	3.8	K	25	良好	白	No.23 一括 肥前系 施釉 外面染付 二重網目文 厚手 18c前半	5-1
18	磁器	碗	(9.1)	[3.8]	—	DI	15	良好	白	肥前系 施釉 内外面染付 長石(白色粒子)浮き出でやや難 18c前半	4-12
19	鉄製品	釘	長さ[3.3]	幅0.5	厚さ0.5	重さ7.5	—	—	—	—	6-12
20	銅製品	不明	長さ[4.8]	幅0.5	厚さ0.2	重さ2.0	—	—	—	—	6-12
21	銅製品	不明	長さ[4.1]	幅0.4	厚さ0.2	重さ1.2	—	—	—	—	6-12
22	銅製品	不明	長さ[6.7]	幅0.5	厚さ0.2	重さ2.4	—	—	—	—	6-12

18世紀のものである。15は濱戸美濃系陶器の香炉で、灰釉が施釉される。16は濱戸美濃系陶器の徳利胴部片である。外面に灰釉が施釉される。17・18は肥前系磁器である。17は厚手の丸碗で、外面に二重網目文が描かれる。18は外面に二重網目文、内面に網目文がある。いずれも18世紀前半の所産である。

19は鉄製の方頭角釘で頭部先端を欠く。20~22は不明銅製品で、同一個体かもしれない。出土遺物は17世紀後半~18世紀前半頃が主体となる。

第2号土壤（第12図）

第2号土壤はA-2グリッドに位置する。長方形の形態で、第1号土壤とA-2グリッドP1に壊されていた。規模は残存長2.03m、幅0.53m、

深さ0.11mである。主軸方位はN-10°-Eを指す。覆土は白色粒子を少量含む暗褐色土であった。遺物はなく時期は不明であるが、重複する第1号土壤との関係から18世紀前葉以前となる。

第3号土壤（第12図）

第3号土壤はA-1グリッドに位置する。重複する第4号土壤より新しく第4号畝状構造との新旧関係は不明である。平面形態は円形で、規模は長径0.62m、短径0.60m、深さ0.21mである。覆土はしまりと粘性の強い暗褐色土單層であった。

出土遺物はなく、時期は不明である。

第4号土壤（第12図）

第4号土壤はA-1グリッドに位置する。溝状の土壤で、規模は残存長2.07m、幅0.58m、深さ

0.10mである。重複する第3号土壙に壊されていた。第4～7号畠状遺構との新旧関係は不明確であるが、畠状遺構の方が新しいと思われる。覆土は粘性・しまりの強い暗褐色土であった。

出土遺物はなく時期は不明であるが、第2号土壙と形態や方位が類似し、近接時期の所産とすれば18世紀前葉以前の可能性がある。

第5号土壙（第12図）

第5号土壙はA-1・B-1グリッドに位置する。平面形態は楕円形で、規模は長径0.93m、短径0.52m、深さ0.69mである。主軸方位はN-82°-Eを指す。覆土は5層に分層された。第1～3層は柱抜き取り痕にも似た堆積状況が観察されたが、周間に建物跡は確認できなかった。出土遺物は検出されず、時期は不明である。

第6号土壙（第12図）

第6号土壙はA-1・B-1グリッドにあり、第5号土壙の東側に隣接する。平面形態は楕円形で、規模は長径0.74m、短径0.47m、深さ0.34mである。主軸方位はN-85°-Wを指す。覆土は2層に分層され、粘性・しまりの強い土質であった。出土遺物はなく、時期は不明である。

第7号土壙（第12図）

第7号土壙はC-2グリッドに位置する。周囲は攪乱を受け、遺存状態は良くない。平面形態は楕円形と推定される。残存規模は長径0.75m、短径0.20m、深さ0.40mである。主軸方位は現状で計測するとN-85°-Wを指す。覆土は白色粒子を多量に含む黒褐色土單層で、噴砂か明瞭に観察された。出土遺物はなく、時期は不明である。

第8号土壙（第12図）

第8号土壙はA区北東端のA-2グリッドに位置する。第8号土壙は第1号土壙直下に位置し、第8号土壙の方が古いが、両者は同一土壙の可能性もある。形態は略円形で、規模は長径0.85m、短径0.81m、深さ0.24mである。覆土は白色粘土を少量含む灰褐色土で、粘性としまりの強い土質

であった。

出土遺物はなく時期は不明だが、第1号土壙との関係から18世紀前葉またはそれ以前となる。

第9号土壙（第12図）

第9号土壙はB区東端のB-4グリッドに位置する。平面形態は不整円形で、規模は長径0.85m、短径0.75m、深さ0.20mである。覆土は暗褐色土單層であった。出土遺物はなく、時期は不明である。

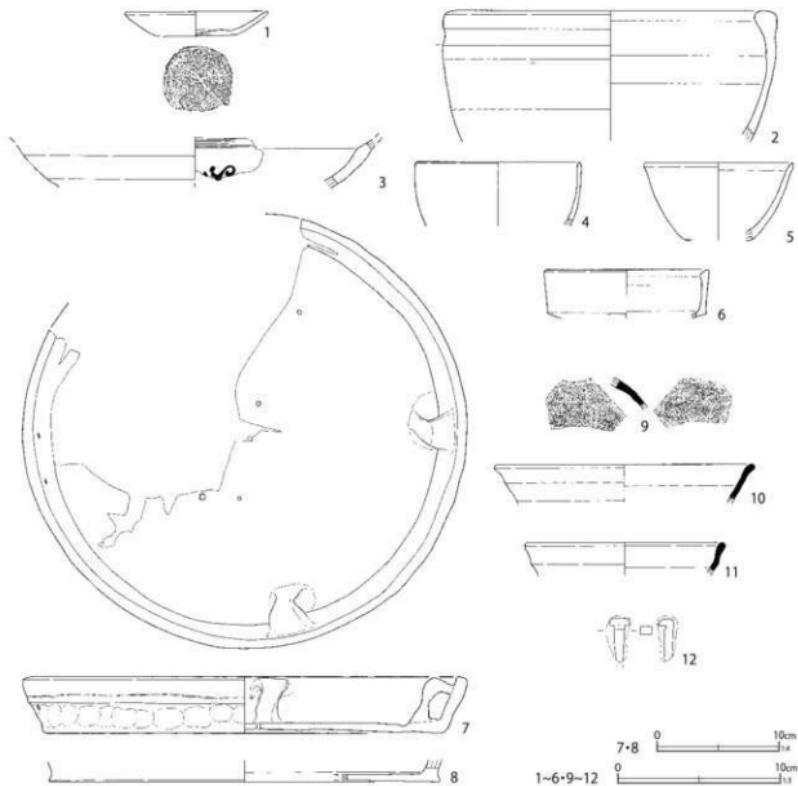
第10号土壙（第12図）

第10号土壙はB区東端のB-4グリッドに位置する。平面形態は不整方形で、規模は長軸長0.58m、短軸長0.48m、深さ0.23mである。主軸方位はN-62°-Eを指す。底面は東壁と西壁際が溝状に深く掘り込まれていた。覆土には褐色ブロックが多量に含まれていた。出土遺物はなく性格・時期は不明である。

第12号土壙（第12図）

第12号土壙はB区東端のB-4グリッドに位置する。重複する第11号土壙を壊してつくられていた。また、西壁の一部は攪乱を受けていた。平面形態は不整長方形で、規模は長軸長2.28m、短軸長1.45m、深さ0.30mである。主軸方位はN-84°-Wを指す。小窓穴状の土壙で、底面は概ね平坦である。覆土は上下2層に分層された。上層は褐色粒子を多量に含む暗褐色土で、土器小片が多量に含まれていた。下層は暗褐色粒子を多量に含む褐色土が堆積していた。

第13図1はかわらけ小皿である。底部は回転糸切りで、内面底部と体部の境を凹ませている。江戸在地系である。2は瀬戸美濃系陶器の片口鉢である。胴部外面は回転ヘラケズリ、内外面に灰釉が施釉される。18世紀前半～中葉に比定される。3は瀬戸美濃系陶器の皿である。口縁部内面はカキ目状で、その下部は唐草状の意匠が陰刻されている。内外面縁部風の銅線釉が施釉される。17世紀後半頃のものと思われる。



第14図 第12号土壙出土遺物

4は京都信楽系の陶器丸碗で18世紀中葉、5は京都信楽系のいわゆる小杉碗である。底部高台を欠失する。内外面施釉されるが、底部外側縁は露胎である。18世紀後半であろう。6は瀬戸美濃系陶器の香炉で、口縁部内面から外面には灰釉が施釉される。18世紀代と思われる。

7は土質質土器焙烙で体部下半は指押さえ、口縁部には接合痕を残す。底面は板枠状の痕跡を残す。吊手は2個残る。対になる位置には側面に二次的に穿孔された小孔が2個穿たれている。8

は瓦質土器の焙烙である。外側面はナデか。面取りはしていない。底部皺状痕を残す。

9～11は須恵器で、本来は重複する第11号土壙に帰属するものと思われる。9は須恵器長頭瓶肩部である。赤灰色の胎土で、東金子産か。10は須恵器高台付塊と思われる。末野産か。11の須恵器坏の产地は不明である。12は鉄製の角釘である。

土壙の時期は18世紀代が主体と推定される。

(3) 故状遺構(第15図)

故状遺構は西側調査区(A区)北部に集中して

第5表 第12号土壤出土遺物観察表（第14図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	回数
1	かわらけ	小皿	(8.7)	1.5	4.0	All.	40	良好	褐	江戸在地系かわらけ 底部左回転糸切り痕	5-2
2	陶器	片口鉢	(19.0)	[8.0]	—	DJK	15	良好	灰白	No.4 潤戸美濃系 内外面灰釉 外面回転ヘラケズリ 接合しない破片あり 18c前半～中葉	5-4
3	陶器	皿	—	[3.0]	—	DJK	5	普通	灰白	No.3 潤戸美濃系 斜割か 内外面綠釉 17c後半	
4	陶器	碗	(10.0)	3.9	—	IK	15	良好	灰白	No.17・B-4Gr 京都信楽系 丸碗 18c中葉	5-5
5	陶器	碗	(9.0)	[4.7]	—	K	15	良好	灰白	No.17 京都信楽系 小杉碗 施釉 体部下端露胎 18c後半	5-3
6	陶器	香炉	(10.0)	3.0	—	K	5	良好	灰白	瀬戸美濃系 簡形香炉 灰釉 18c代 口径不安定	
7	土師質土器	焰壺	35.0	4.6	32.6	CDGHI	70	普通	浅黄橙	No.1・5・6・8・10・11・12・13・14・15・16 外面煤付着 把手は2個残る 底部に小孔5個 側面に2個(1対) 穿たれ正在いる	5-6
8	瓦質土器	焰壺	—	[1.8]	[32.0]	CDGI	5	普通	灰黄	底部礫状底 外側面ナデ 17c後半	
9	須恵器	長頸瓶	—	[2.0]	—	D	—	普通	赤灰	紫灰色 東金子産か SK11-4と同一か	
10	須恵器	(高台付周)	(15.7)	2.4	—	DJK	5	普通	灰	No.9 末野産か	
11	須恵器	杯	(12.0)	2.0	—	IK	5	良好	灰	產地不明(三毳産?)	
12	鉄製品	釘	—	—	—	—	—	—	—	No.2	6-12
			長さ[2.7]	幅0.5	厚さ0.7	重さ4.7					

第6表 砓状遺構一覧表

番号	グリッド	長さ(m)	幅(m)	深さ(m)	方位	備考
1	A-2	[1.80]	0.3	0.15	N-85°～W	出土遺物なし
2	A-2	1.43	0.28	0.11	N-1°～E	出土遺物なし 覆土中に浅間A軽石あり
3	A-1・2	[0.90]	0.28	0.08	N-87°～W	出土遺物なし 覆土中に浅間A軽石あり
4	A-1	[1.10]	0.20	0.10	N-84°～W	出土遺物なし 覆土中に浅間A軽石あり
5	A-1	[0.48]	0.24	0.18	N-88°～W	出土遺物なし 第4・6号と一連の軽石
6	A-1・2	[5.15]	0.23	0.10	N-86°～W	第4号土壇と重複 新旧不明 覆土中に浅間A軽石あり
7	A-1・2	[6.10]	0.27	0.13	N-81°～W	第4号土壇と重複 新旧不明 覆土中に浅間A軽石あり
8	A-2	0.62	0.21	0.17	N-89°～W	出土遺物なし 覆土中に浅間A軽石あり
9	A-2	1.50	0.21	0.17	N-86°～W	出土遺物なし 覆土中に浅間A軽石あり
10	B-2	0.93	0.16	0.10	N-27°～W	出土遺物なし 覆土中に浅間A軽石あり
11	B-2	0.70	0.25	0.16	N-35°～W	瀬戸美濃系陶器他利細片 覆土中に浅間A軽石あり
12	B-2	0.74	0.25	0.17	N-25°～W	出土遺物なし 覆土中に浅間A軽石あり

いた。12条の歓状遺構が検出され、分布と方向から東西方向が8条（第1・3～9号）、それと直交する南北方向が1条（第2号）、それらから南に外れる一群（第10～12号）の3群がある。

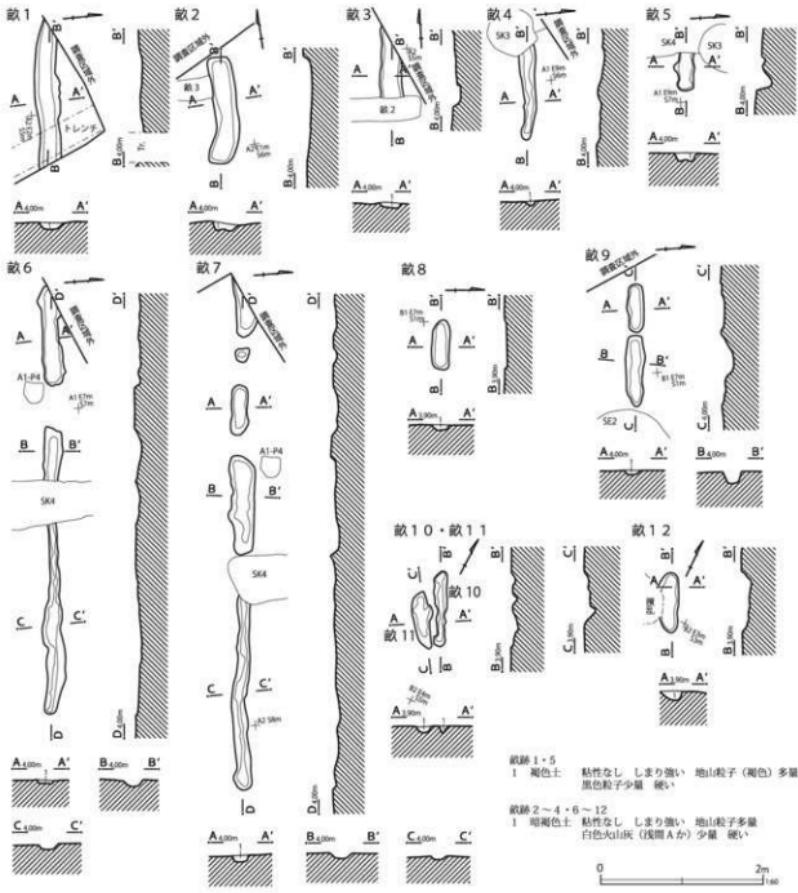
覆土は第1号・第5号歓状遺構に褐色粒子を多量に含む褐色土が堆積していた。他の第2～4、第6～12号歓状遺構には浅間A軽石と思われる火山灰が確認された。

出土遺物は第11号歓状遺構から瀬戸美濃系陶器（徳利か？）小片が1点出土した。18世紀以降と思われ、覆土中から検出された浅間A軽石の降下年代の天明三年（1783）とも整合的である。位置関係と覆土の堆積状態から18世紀後半またはそれ以降の歓状遺構と推定される。

位置や規模、出土遺物の有無、覆土の状態などは第6表に示した。

（4）ピット（第17図）

調査区からは39個のピットが検出された。規則的に並ぶものではなく、時期は近世以降と推定される。規模は第8表に記載し、出土遺物は第16図に示した。1はB-1グリッドP1出土の弥生後期～古墳時代前期の土器片と思われる。内面に一段の折り返し痕、その下は横方向のハケ目調整される。器形と大きさは不明であるが、市内で最古段階の土器の可能性がある。いずれにせよ混入品であろう。2は瀬戸美濃系磁器端反碗である。酸化クロムの染付文から、近代の所産と推定される。



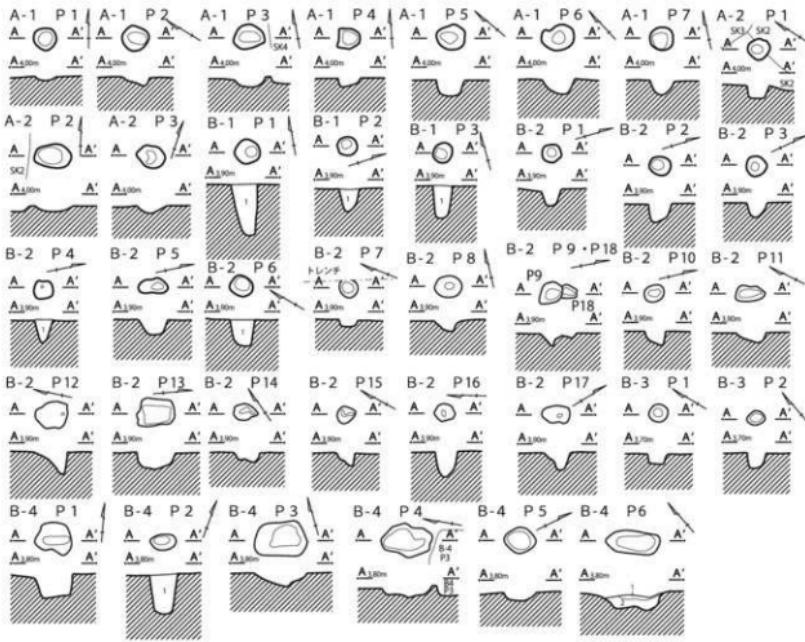
第15図 第1～12号諏状遺構



第16図 ピット出土遺物

第7表 ピット出土遺物観察表(第16図)

番号	種別	器種	口径	高さ	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	土器	不明	—	[2.0]	—	GIR	5	普通	にぶい灰	口径不明だが大型品と思われる 弥生後期～古墳前期か	5-7
2	磁器	碗	(8.8)	[3.5]	—	K	10	良好	白	瀬戸美濃系 施釉・染付 端反碗 般化クロム青磁碗	19c後半 5-8



0 2m

B-1 P1
1 明褐色土 粘性なし しまり強い 褐色粒子多量 褐色ブロック ($\phi 20 \sim 30$ mm) わかに炭化粒子 深く下の方は見えないが、深さ20 cmより下は褐色ブロックの混入がない

1 明褐色土 粘性ややあり しまり弱い 褐色粒子少量 褐色ブロック ($\phi 10$ mm)

B-1 P3
1 明褐色土 粘性ややあり しまり弱い 褐色粒子少量

B-2 P4・P6
1 明褐色土 粘性なし しまり強い 褐色ブロック ($\phi 20 \sim 30$ mm) 多量

B-4 P2
1 暗褐色土 粘性ややあり しまり強い 褐色粒子少量 炭化粒子

B-4 P6
1 暗褐色土 粘性なし しまり強い 褐色粒子多量 褐色ブロック ($\phi 10 \sim 20$ mm) 炭化粒子極少量

2 暗褐色土 ややシルト質 粘性ややあり しまり強い 暗褐色粒子少量

第17図 ピット

第8表 ピット一覧表

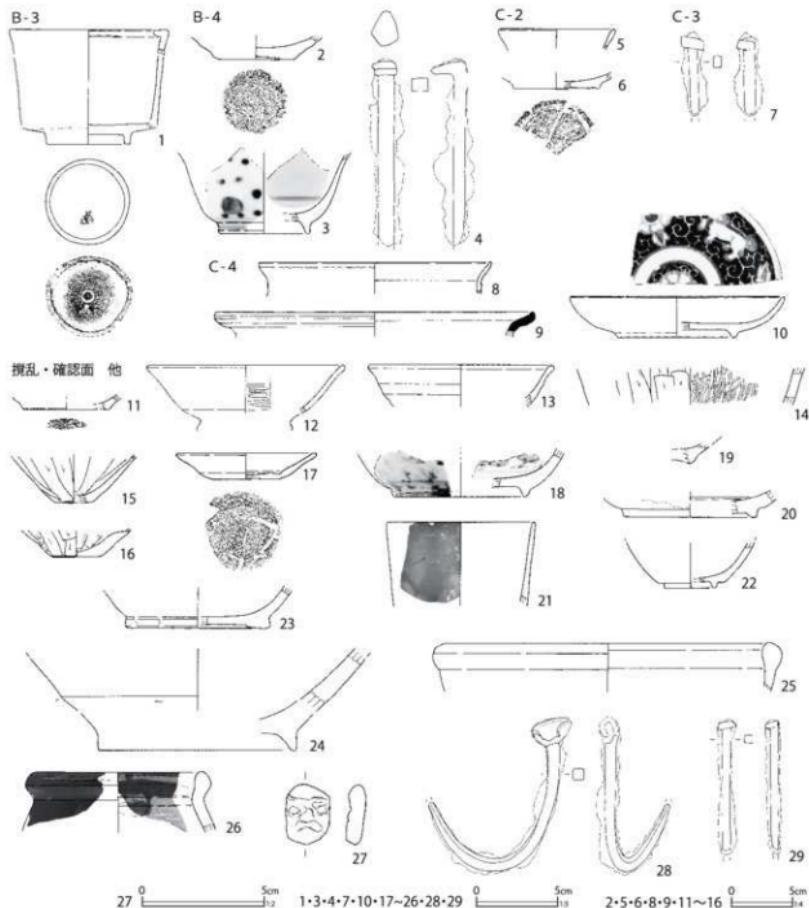
グリッド	番号	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm)	グリッド	番号	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm)	グリッド	番号	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm)	
A-1	P 1	28.0	26.9	5.0	B-2	P 1	23.6	22.1	22.2	B-2	P 14	30.6	19.6	11.6	
	P 2	32.4	29.7	11.4		P 2	25.8	22.4	24.7		P 15	22.5	20.4	16.5	
	P 3	36.0	29.6	13.5		P 3	24.3	24.1	18.7		P 16	24.3	20.8	33.5	
	P 4	25.6	24.4	12.4		P 4	23.3	20.5	29.1		P 17	34.2	[19.6]	21.8	
	P 5	34.3	31.4	29.3		P 5	35.9	18.6	20.6		P 18	[17.6]	17.0	6.4	
	P 6	39.5	31.4	20.8		P 6	28.3	26.3	34.2		B-3	P 1	23.8	21.9	13.6
	P 7	28.7	27.5	18.1		P 7	22.6	[21.6]	9.1		P 2	22.0	17.0	18.2	
A-2	P 1	26.9	26.0	15.7		P 8	33.7	26.3	13.3	B-4	P 1	44.1	38.9	29.8	
	P 2	45.8	29.9	6.5		P 9	32.7	26.0	14.5		P 2	30.6	18.9	49.2	
	P 3	35.0	26.3	10.1		P 10	24.2	20.0	20.1		P 3	64.5	41.8	18.8	
B-1	P 1	59.5	31.1	62.8		P 11	35.7	19.0	14.3		P 4	61.7	42.0	14.9	
	P 2	24.1	27.7	28.7		P 12	39.2	29.0	28.5		P 5	38.5	31.9	11.0	
	P 3	24.7	22.4	38.9		P 13	45.7	32.0	21.6		P 6	64.9	27.5	19.9	

(5) グリッド他出土遺物 (第18図)

第18図にはグリッドとその他から出土した遺物を掲載した。1~10はグリッド出土遺物、11~29は確認面、攪乱等、出土位置の特定できない資料である。1は肥前系陶器香炉で、口縁部と底部が接合しない。高台内に刻印「木弥下」の組文字がある。17世紀後半~18世紀前半と思われる。

2・5・6はロクロ土師器坏、8は土師器武藏型甕である。3は瀬戸美濃系磁器の端反碗、10は皿である。10は近代の所産と思われ、唐獅子と牡丹が描かれている。4・7は角釘である。9は產地不明の須恵器甕である。

11~13はロクロ土師器坏類である。12は内黒楓と思われ、内面黒色処理とミガキが施される。



第18図 グリッド他出土遺物

14~16は土師器甕である。14は厚甕で、外面ケズリ、内面はミガキが施される。非武藏型甕である。15・16は武藏型甕底部である。

17はかわらけ小皿で、江戸在地系である。18は肥前波佐見系磁器皿である。19は瀬戸美濃系陶器皿である。大室第1~第2段階のものである。20は瀬戸美濃系陶器皿で、見込みに環状の重ね焼き痕が残る。21は萬古系陶器の碗で、雷文が刻まれている。19世紀後半~20世紀の所産か。22は京都信楽系陶器で、いわゆる小杉碗である。内外面施

釉され、底部は削り出し高台である。19世紀前半代のものである。23の陶器鉢は産地不明、24は常滑系片口鉢と思われる。体部外面下位は回転ヘラケズリされる。中世13世紀後半の所産であろう。確認面から出土した。25は瀬戸美濃系捏鉢で、18~19世紀であろう。26は瀬戸美濃系有耳壺である。近世の所産であるが、細かい時期の限定は難しい。27は土製品で、泥面子である。人物の顔を描いた「芥子面」である。表面は風化している。28・29は鉄製釘である。

第9表 グリッド他出土遺物観察表(第18回)

番号	種別	器種	口径	高さ	底径	胎土	残存	焼成	色調	出土位置	備考		団版
											横	縦	
1	陶器	香炉	(9.6)	(7.0)	5.1	I	20	良好	灰白	B-3Gr	肥前系京焼風 灰釉 高台内刻印「木舟下」	6-1	
2	ロクロ土師器	壺	—	1.4	4.6	ADEGH	80	普通	橙	B-4Gr	底部回転糸切り	5-11	
3	磁器	碗	—	5.0	(5.4)	K	15	良好	白	B-4Gr	瀬戸美濃系 端反碗 19c前葉	6-2	
4	鉄製品	釘	長さ [11.4]	幅0.8	厚さ1.0	重さ55.5				B-4Gr		6-12	
5	ロクロ土師器	壺	(9.4)	[1.7]	—	HDKL	5	普通	にぶい橙	C-2Gr	小振りの壺		
6	ロクロ土師器	壺	—	[1.4]	—	HDK	20	普通	橙	C-2Gr	風化により底部調整不明瞭 手持ちヘラケズリ 高台付塊		
7	鉄製品	釘	長さ [4.8]	幅0.5	厚さ0.7	重さ16.3				C-3Gr		6-12	
8	土師器	甕	(19.0)	[2.6]	—	CDEHH	5	普通	橙	C-4Gr	武藏型甕		
9	須恵器	甕	(26.0)	[2.1]	—	DBKL	5	普通	にぶい赤褐	C-4Gr	赤灰釉	6-3	
10	鉢	皿	(13.0)	2.5	(7.0)	K	30	良好	白	C-4Gr	瀬戸美濃系 施釉 唐獅子と牡丹 唐草文様 近代 (Dc後半以降)	6-4	
11	ロクロ土師器	壺	—	—	—	HDKL	5	普通	浅黄橙	複乱7	底部回転糸切り 底径不安定		
12	ロクロ土師器	高台碗	(16.0)	[4.0]	—	ACDK	10	不良	にぶい黄橙	複乱7	内面黒色処理 ミガキと思われる		
13	ロクロ土師器	碗	(15.0)	3.4	—	AHKL	5	良好	にぶい橙	複乱12	硬質 金雲母細片含む		
14	土師器	甕	—	[3.0]	—	DBKL	10	良好	にぶい褐	確認面	古代の厚甕 非武藏型 外面軽いタテケズリ 内面へラミガキ 10c代か	5-9	
15	土師器	甕	—	[3.9]	(3.0)	CDEHH	30	良好	にぶい橙	B区南側溝	武藏型コの字彫底部		
16	土師器	甕	—	[2.3]	(4.0)	CDGIL	40	良好	明赤褐	B区南側溝	武藏型甕の未成品? 裏面のケズリ込み弱い	5-10	
17	かわらけ	小皿	(8.4)	1.6	4.0	AHEK	45	良好	にぶい橙	確認面	江戸在地系 底部回転糸切り痕 内面有機物 (煤や漆か) 付着	6-5	
18	磁器	皿	—	[3.0]	(8.0)	K	20	良好	白	調査区壁	肥前波佐見系 叠付を除き施釉・染付 濱れ珍 手工 18c前葉	6-6	
19	陶器	皿	—	[1.2]	(10.0)	I	5	良好	淡黄	調査区壁	瀬戸美濃系 灰釉 丸皿から端反皿 大室第1~2段階 15c末~16c前葉	6-7	
20	陶器	皿	—	[1.6]	(8.0)	IK	10	良好	淡黄	複乱4	瀬戸美濃系 灰釉 環状の重ね焼痕 削り出し 高台 17c後半		
21	陶器	碗	(9.0)	[4.1]	—	含有物なし	10	良好	暗赤褐	複乱3	萬古系陶器 外面上位に雷文施文 硬質 19c後半~20c	6-8	
22	陶器	碗	—	[2.8]	(3.2)	K	25	良好	灰白	確認面	京都信楽系 小杉碗 施釉 底部削り出し高台 19c前半		
23	陶器	鉢	—	[2.6]	(8.2)	GI	35	普通	浅黄橙	複乱3	産地不明 白色釉と灰(銀)色釉掛け分け 近代		
24	陶器	片口鉢	—	[3.7]	—	DI	5	良好	灰	確認面	常滑系 外面下位回転ヘラケズリ 13c代と思われる	6-10	
25	陶器	捏鉢	(19.8)	[2.0]	—	K	5	良好	淡黄	複乱3	瀬戸美濃系 灰釉 口径不安定 18~19c		
26	陶器	壺	(10.0)	[3.7]	—	DI	20	良好	灰	B区北側溝	瀬戸美濃系 有耳壺 灰釉 近世	6-11	
27	土製品	泥面子	2.5	1.8	0.7	KL	100	普通	橙	調査区壁	芥子面 表面風化	6-9	
28	鉄製品	釘	長さ [9.5]	幅0.7	厚さ0.7	重さ44.1				複乱3		6-12	
29	鉄製品	釘	長さ [8.1]	幅0.5	厚さ0.5	重さ11.6				複乱4		6-12	

V 調査のまとめ

越谷警察署前遺跡では、平安時代の土壙、近世の井戸跡や土壙、畝状遺構などが検出された。また、古墳時代前期と推定される土器片が出土し、増林中妻遺跡（菟原・鬼塚2020）と共に、市内最

古段階の遺構が周辺に存在することが予想された。草加市や八潮市など周辺の中川低地では古墳時代前期に集落が開始される例が多く、本遺跡もそれらと連動する可能性が高い。

1 古代の遺物について

さて、ここでは古代の遺構とその出土遺物を取り上げて、周辺遺跡（越谷市大道第1・第2遺跡、八潮市八條遺跡とやや地域は離れるが、大道遺跡と同様、土器焼成坑が検出された加須市樋ノ口遺跡）を参考に出土土器の様相について概要をまとめておきたい。大道第1・第2遺跡は本遺跡の北東約4.5km、八條遺跡は南東約5.0kmに位置する。

第Ⅰ期 本遺跡から検出された古代の遺構は第11号土壙1基で、土師器甕、ロクロ土師器壺と須恵器甕・瓶の破片が出土した。ロクロ土師器壺は口径13.0cm、器高3.2cmとやや大振りで扁平な器形である。底径は7.0cmと大きく、回転糸切り後、周辺部と体部下端を手持ちヘラケズリ調整している（第19図1）。土師器甕は武藏型甕、いわゆるコの字状口縁甕である（2）。頸部が直立するコの字状口縁甕で、古代煮炊具を検討した末木分類のB2類に相当する（末木2006）。

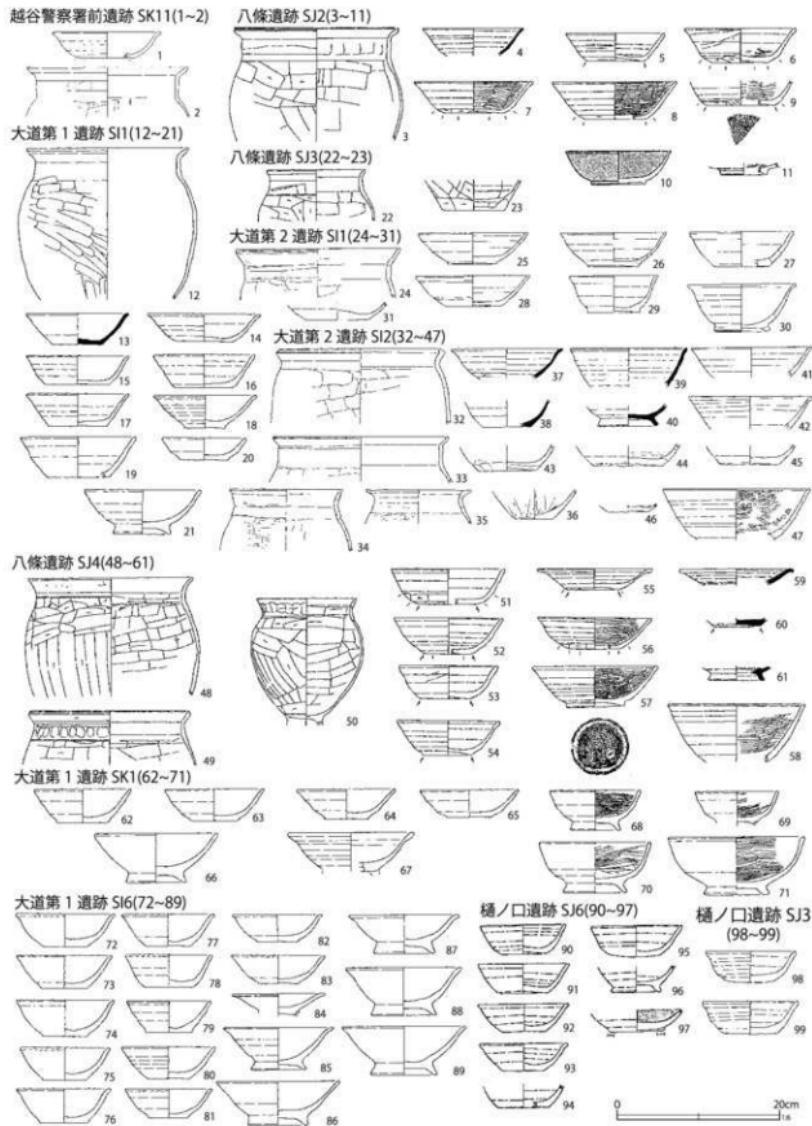
ロクロ土師器壺の類例を検索すると、八潮市八條遺跡第2号住居跡がある（第19図3～11）。5は扁平な逆台形の器形で本遺跡例に類似するが、底部再調整はない。須恵器壺（4）は南比企産でHVIII期である。八條遺跡では供膳器の主体は既に内黒壺にあるようだ。6～9は内黒壺で、体部下端と底部周縁をヘラケズリ調整する。10はK-14号窯期の灰釉陶器壺である。11は内黒高台で、低い高台が付く。内黒壺は主体的であるが、高台壺はまだ多くはないようである。

第19図12～21は越谷市大道第1遺跡第1号住居

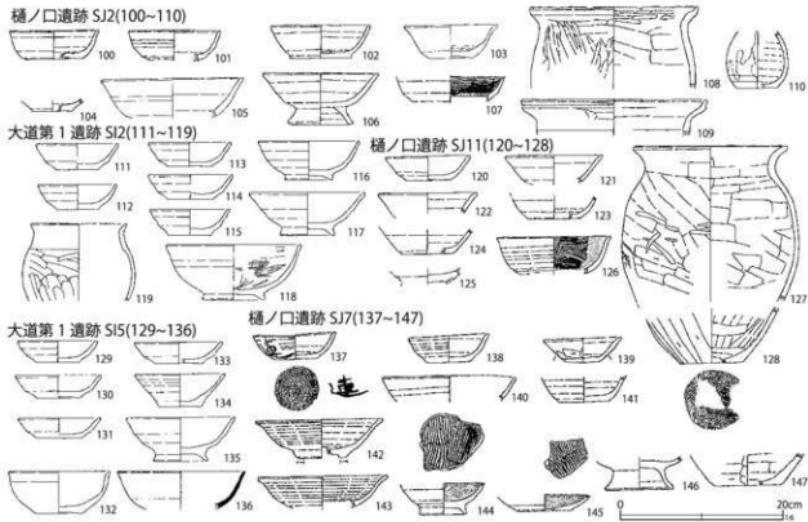
跡出土土器で、14のロクロ土師器壺は本遺跡例に類似する。底部（十体部下端か）は一方向の手持ちヘラケズリが施される。コの字甕B2類（12）と南比企産HVIII期の須恵器壺（13）が併出する点は八條遺跡と共通する。他のロクロ土師器壺はバラエティーがある。底部は回転糸切り後外周ヘラケズリ調整するもの（15・16・19）と、糸切り後無調整のもの（17・18・20）がある。18は深身、逆台形の器形で体部外面のロクロ目がきつく、三和産須恵器にも似るが、体部のヘラケズリはない。20は小型・浅身である。18・20は伴うか否か検討を要する。19は無台の深塊形態で底部は回転ヘラケズリされる。21はロクロ土師器高台壺で、内面のミガキと黒色処理はない。18・20を除くと本遺跡第11号土壙とはほぼ同時期と思われ、概ね9世紀3/4期を中心とした時期と考えておきたい。

八條遺跡第2号住居跡は土師器甕が同一段階と思われるが、ロクロ土師器壺に底部調整がないこと、内黒壺が主体となることなど様差が認められる。両遺跡は数キロメートルしか隔たっていないため、小地域差とみるのか、若干の時期差が反映されているのか検討が必要であろう。

第Ⅱ期 第11号土壙の次の段階は大道第2遺跡第1号住居跡（第19図24～31）がある。土師器甕はコの字甕B2類であるが、ロクロ土師器壺は底径が縮小したため、体部の開きが大きくなっている（25～28）。30は木野産須恵器高台壺で、9世紀末～10世紀初頭頃であろう。底部は回転糸切り後無調整が大半となる。



第19図 參考資料（1）



第20図 参考資料（2）

大道第2遺跡第2号住居跡（32～47）も第1号住居跡と概ね同時期と思われるが、ロクロ土師器壺の様相は不明確である。大振りの壺と内黒椀が伴うようだ（47）。土師器武藏型甕（33～35）、特に小型甕はB3類と思われ、やや新しい様相が見られる。また、32はポスト武藏型甕でもあるC類甕と思われる。C類甕は胴部上半縦方向のヘラケズリが通例であるが、胴部は横方向のヘラケズリでB類甕の調整技法を踏襲している。八條遺跡第3号住居跡の土師器甕底部（13）もC類甕と思われる。

八條遺跡第4号住居跡（48～61）はB3類の甕（48～50）にロクロ土師器壺・皿、内黒壺・内黒高台壺と未野産須恵器皿（59）と南北企産須恵器壺（60）・高台壺（61）が伴う。内黒高台壺の底部は低い（57）。58は大型の内黒椀か。ロクロ土師器壺はやや深身で体部の立ち上がりに丸みがある。底部と体部下端にヘラケズリが施されるもののが含まれる（51・52）。

第五期 大道第1遺跡第1号土坑（第19図62～71）、大道第1遺跡第6号住居跡（72～81）、桶ノ口遺跡第6号住居跡（90～94）・第3号住居跡（98・99）・第2号住居跡（第20図100～109）が該当する。ロクロ土師器壺は小型化が進行し、浅身の形態が増える傾向にある。大道第1遺跡第1号土坑は土器焼成坑であり、口径11.8～12.0cm、底径5.8cm、器高3.9cm前後にまとまっている。また、高台壺とともに、3～4種類に法量分化した内黒高台壺が定量で加わるようだ（68～71）。桶ノ口遺跡第2号住居跡では、胴部に縦ミガキが加わる常縦型甕が出土している（第20図108・109）。

第四期 大道第1遺跡第2号住居跡（111～119）・第5号住居跡（129～135）、桶ノ口遺跡第11号住居跡（120～128）・第7号住居跡（137～147）が該当しよう。ロクロ土師器壺は口径10cm前後、器高は3.0cm前後のものが多い。大道第1遺跡第5号住居跡のそれは器高が2.1～2.8cmまで縮小している。桶ノ口遺跡第11号住居跡出土の土

師器厚甕は底部静止糸切りである（128）。器形や胴部のケズリはC類甕とは異なり、武藏型甕の影響を留めているのかもしれない。時期の特定は難

しいが、第III期～第IV期はロクロ土師器小皿の出現以前の10世紀前半～中葉頃と考えておきたい。

引用・参考文献

- 愛知県 2007『愛知県史別編 窯業2 中世・近世 濱戸系』
- 愛知県 2012『愛知県史 別編 窯業3 中世・近世 常滑系』
- 蘆田伊人編 1968『新編武藏風土記稿（再版）』第十巻 大日本地誌体系（10）雄山閣
- 渥美賀吾 2018「黒色磨研土器からみた常陸における古代土器の窯式転換とその背景」『婆良岐考古』第40号
- 岩槻市 1983『岩槻市史考古資料編』
- 菟原雄大・鬼塚千花 2020「越谷市増林中麦遺跡－市域で初めて確認された古墳時代前期の遺跡－」『埼玉考古第55号』
- 浦和市遺跡調査会 1982『井沼方・大北・和田北・西谷・吉場遺跡発掘調査報告書』浦和市遺跡調査会報告書第20集
- 大橋康二 1989『肥前陶磁』ニューサイエンス社
- 大宮市遺跡調査会 1993『水川神社東遺跡 水川神社遺跡 B-17号遺跡』大宮市遺跡調査会報告第42集
- 鬼塚知典 2018「古墨田川の一考察－春日部市周辺の古墨田川流路」『埼玉考古53』埼玉考古学会
- 柿沼幹夫 2021「考古学から考える古墨田川と利根川の流路（覚書その3）野外調査研究第5号
- 春日部市遺跡調査会 1998『小瀬山下北遺跡2次』春日部市遺跡調査会報告書第5集
- 春日部市教育委員会 2005『春日部市庄和町史編さん資料（14）原始・古代資料－考古－』
- 春日部市教育委員会 2018『埼玉県春日部市 神明貝塚総括報告書』春日部市埋蔵文化財発掘調査報告書20
- 川口市 1985『吼原遺跡（歴史時代・図版編）』川口市遺跡調査会報告第7集
- 川口市 1986『川口市史 考古編』
- 黒済和彦 2006「東関東産須恵器の流通」『古代武藏国須恵器流通と地域社会』埼玉考古学会
- 古河市 2011『江口長沖窯跡』古河市埋蔵文化財調査報告書第5集
- 越谷市 1975『越谷市史』第1巻
- 越谷市教育委員会 1971『見田方遺跡発掘調査報告書』
- 越谷市教育委員会 2016『大道遺跡発掘調査報告書I－西大袋土地区画整理事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書I－』越谷市埋蔵文化財発掘調査報告書第1集
- 越谷市教育委員会 2017『越ヶ谷御殿跡発掘調査報告書I』越谷市埋蔵文化財発掘調査報告書第2集
- 埼葛地区文化財担当者会 2007『埼葛の遺跡』
- 埼玉県 1954『武藏國郡村誌』第十一巻
- 埼玉県 1980『新編埼玉県史資料編1 原始 旧石器・縄文』
- 埼玉県 1987『新編埼玉県史 通史編1』
- 埼玉県 1993『中川水系人文』中川水系総合調査報告書2
- 埼玉県埋蔵文化財調査事業団 1982『下椿』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第18集
- 埼玉県埋蔵文化財調査事業団 1984『明花向・明花上ノ台・とうのこし・井沼方馬堤』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第35集
- 埼玉県埋蔵文化財調査事業団 1984『中原後・石御堂』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第39集
- 埼玉県埋蔵文化財調査事業団 1993『水判土堤の内・林光寺・根切』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第132集
- 埼玉県埋蔵文化財調査事業団 1996『五闇中島／堤根』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第181集
- 埼玉県埋蔵文化財調査事業団 1997『原／谷畑』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第179集
- 埼玉県埋蔵文化財調査事業団 1997『石神貝塚』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第182集
- 埼玉県埋蔵文化財調査事業団 2001『下野田稻荷原遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第263集

- 埼玉県埋蔵文化財調査事業団 2003『木津内貝塚』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第287集
- 埼玉県埋蔵文化財調査事業団 2005『東地続田遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第314集
- 埼玉県埋蔵文化財調査事業団 2007『飯積遺跡Ⅱ』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第334集
- 埼玉県埋蔵文化財調査事業団 2008『釣上碇遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第348集
- 埼玉県埋蔵文化財調査事業団 2013『八條遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第407集
- 埼玉県埋蔵文化財調査事業団 2014『諏訪野遺跡Ⅰ』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第410集
- 埼玉県埋蔵文化財調査事業団 2016『浅間下遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第418集
- 埼玉県埋蔵文化財調査事業団 2017『横野地北遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第434集
- 埼玉県埋蔵文化財調査事業団 2018『毛長沼外瓦A遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第447集
- 埼玉県立歴史資料館 1987『埼玉の古代窯業調査報告書』
- 埼玉考古学会 1976『谷原新田遺跡』『埼玉県土器集成4』
- 佐々木義則 2007『常陸型甕の生産と流通』『婆良岐考古』第29号
- 佐々木義則 2009『武田遺跡群における平安時代土師器窯・小皿編年』『婆良岐考古』第31号
- 草加市 1988『草加市史自然・考古編』
- 草加市教育委員会 2021『令和2年度東地続田遺跡』草加市埋蔵文化財調査報告書第3集
- 塙野 博 2004『埼玉の古墳 北足立・入間』
- 塙野 博 2004『埼玉の古墳 北埼玉・南埼玉・北葛飾』
- 庄和町教育委員会 2003『須賀遺跡－弥生時代中期の再葬墓群と古環境の復元－』庄和町文化財調査報告第9集
- 庄和町教育委員会 2005『権現山遺跡第1次調査』庄和町文化財調査報告書第15集
- 末木啓介 2006『足立郡における九世紀後半から一〇世紀の煮炊具について』『埼玉の考古学II』埼玉考古学会
- 杉戸町 2003『杉戸町史 考古資料編』
- 草加市 1988『草加市史自然・考古編』
- 田中広明 2003『古代集落の再編と終焉』『中世東国世界1 北関東』高志書院
- 田中祐樹 2014『杉戸町上椿遺跡出土土器の再検討』『埼玉考古49』
- 千葉県 1998『千葉県の歴史 資料編 考古3』
- 戸田市 1981『戸田市史資料編1 原始・古代・中世』
- 富田和夫 2002『飛鳥・奈良時代の官衙と土器』『坂東の古代官衙と人々の交流』埼玉考古学会
- 長谷川 淳 2006『丹波 近世丹波焼の諸相』『江戸時代の焼きもの 一生産と流通－』財団法人瀬戸市文化振興財團埋蔵文化財センター
- 鳩ヶ谷市教育委員会 1988『三ツと遺跡他市内3遺跡』鳩ヶ谷市埋蔵文化財調査報告書第24集
- 鳩ヶ谷市教育委員会 2009『鳩ヶ谷市の歴史－論集・三ツと遺跡とその時代－』
- 星間孝志 2006『ロクロ土師器の流通』『古代武藏國の須恵器流通と地域社会』埼玉考古学会
- 福田 聖 2001『埼玉県における低地の周溝墓と建物跡（5）－鍛冶屋・新田口遺跡－』『埼玉考古』第36号
- 松伏町教育委員会 2021『松伏町史資料編 原始・古代・中世』
- 松本太郎 2013『東国の土器と官衙遺跡』六一書房
- 水口由紀子 1991『武藏国における中世成立期の煮炊土器小考』『埼玉考古学論集』埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 水口由紀子 2002『22. 足立郡－水川神社東遺跡－』『坂東の古代官衙と人々の交流』埼玉考古学会
- 森村健一 2006『江戸時代のやきもの－17・18・19世紀にみる大阪・京・堺の生産・流通・消費形態－』財団法人瀬戸市文化振興財團埋蔵文化財センター『江戸時代のやきもの－生産と流通－』
- 渡辺 一 1990『南北企鵝跡群の須恵器の年代－鳩山窯跡の年代を中心に～』『埼玉考古27』
- 渡辺 一 1996『大宮台地東部における平安時代の二三の問題』『埼葛地域文化の研究』埼葛地区文化財担当者会